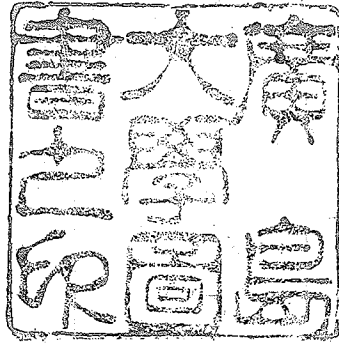


柳田國男編・藤原與一著

伊豫大三島北部方言集

中央公論社版



西村嘉如郎氏寄贈



序

山陽線の汽車の窓からいつでも見て通る海のすぐ向ふの一つの山が、大三島の北の端だといふことを、久しい間私は知らずに居た。この方言集の採集地、愛媛縣越智郡鏡村の肥海(ヒカイ)といふ里は、ちやうど其山の陰になつて居るのだが、こゝまで伊豫國の、しかも名に高い神の島が、突出して來て居ることに氣の付かぬ人も稀ではあるまい。それほどにも大きな大三島ではあるが、山が高く安らかな峠が少なく、村と村とは海沿ひの細路を以て結ばれて居る。舟の往來が夙くから開けて居たとすると、却つて縣外に通ひ易かつた處が多かつたといふことも考へられるのである。國語の地方差と、之を作り上げた諸種の素因とを考察するのに、爰などは誠に都合のよい試験場といふことが出来る。それ故に我々は、特に大三島北部といふ名を以てこの方言集に題せんとするのである。

同じ大三島もずつと南の方へ廻つて見ると、ほんの僅かな渡船を以て越えて行かれるほどの瀬戸があり、それから順々に隣の島を通つて、親國への水運はよく開けて居る。人も夙くより伊豫の方から入り、従つて又多くのなつかしいものをかの方面にもつても居る。問題になるのは斯ういふ場

合にも、なほ一方の近い對岸の文物が目立たずに浸潤して來るものであるかどうか。但しは又血のよしみ、乃至は政治の力といふものが統制して、永く舊來の一體性を保持し得たらうか否かであつて、それが何れに決しても我々の學ぶ所は大きい。陸つゞきの土地だつてもそれは同じことだと、思つて居る人が有るかも知れぬが、海水の隔離といふことはよほど事情がちがふ上に、遠さと海の荒さとの各段階に於て、色々の實驗の出來るのは島である。さうして我々は今ちやうど、大規模にさういふ實驗をしなければならぬ必要に迫られて居り、他の外國では段々とそれが出來にくゝならうとして居るのである。大三島南部其他の方言集が、すぐに引續いて後から出ることを、必ずしも私は主張するのでは無い。同じ中國海上の島々であるからには、どこで採集して見ても半分か三分の二、よく似た單語句法の行はれて居るのは當りまへで、それを又くり返して何度でも集録して行けば、寧ろ讀む者の印象を稀薄にする虞れがある。故に一つの區域の事實を精確にして、次々の各地ではたゞ之と同じくないものを、注意深く拾ひ出し又比較して、それを將來の研究目標とするところが、勞少なくて效果は濃いわけで、乃ちこの方言集は一つの臺帳のやうなものになつて、弘く近鄰諸島の言語現象を意識せんとする人々の爲に、利用せられるであらうことが期待せられるのである。瀬戸内海の方言集としては、前に原君の周防大島のを先づ出した。次には今一つ鹽飽の列島の中からも、出ればよいと念じて居るのであるが、其地點の選定は因縁次第のものである。そこに適任にしてしかも熱心なる人があつて、我々の事業に共鳴してくれるのであれば、ちやうど此邊りで一つと言つて見たところで、それはたゞ切なる希望といふに止まるのである。國が自ら手を

下して、積極的なる調査を企てるといふ時が来るまでは、たゞ自然に採集せられたものゝ出現を待つて、その採集地がどんな處、人がどういふ人であるかといふ點に、十分なる注意を拂ふより他は無。さういふことすらも今までは試みられず、たゞ方言集の數ばかりを算へて居たのである。

この集の藤原與一君は、自身が先づ方言の倦まざる研究者であつた。他處の言葉がどの様にかはり又は似て居るかを知る爲に、もう殆ど國一ぱいがあるまはつて居る。その切れ／＼の各地の知識を以て、一つの學問を組み立てるといふ仕事、如何に緊要のものでありしかも亦どの位六つかしいものであるかを、私などよりはもつと適切に體驗して居る。その上にこの全國方言記録の實現するよりも前から既に私の計畫を知り且つ賛成して居る。念を押しては見たことも無いけれども、もしも此計畫が不幸にして中絶するやうなことがあつたら、必ず志を剛いで再興してくれるのも斯ういふ人であらうとさへ私は期待して居る。それが自身の生れ故郷の、子供の時からの地言葉を、書いて残して置かうといふ氣になつたのだから、單なる愛郷心の所産といふやうな、學問と縁の薄いものでないことは判つて居るのである。但しさうまで言はれると、少しは氣が咎めるといふ如き若干の弱點もまだ無いとは言はれないが、少なくとも同君は是を完成とは思つては居ないだらう。今後も何十年、之を補充し又改訂して、行く／＼四鄰の島に住む人々と共に、言葉と生活との密接なる關聯、斯うより外には進んで來られなかつた自然の途を覺り、従つて全日本の大いなる統一に向つて、如何に導くのが尤も安全なる國語の活き方であるかを學ぶべく、之を毎年の教科書と同様に、始終より良くして行くことに努力することゝ信ずる。大三島北部方言集の第一版は、その意味

に於て重要な記念の書である。

この方言集の排列の順序は、又少しばかり變へて見たが、大體に五十音順のやうな用の無い外形に依ることなく、語辭の生滅する一つの道筋の上を、進つて行かうとする最初の方針はなほ持續して居る。仔細に視る人があれば少しづつは改良して居ることが判る筈だが、それを取立て、言ふほどには、まだ私たちの利用は進んで居ない。名詞を始めに置くといふのも一つの試みであり、素人の話題はこの方に偏して居るから、世間の注意を惹くには適するかも知らぬが、國の中央中流の間では既に成長が停止して、地方には却つて新しい工夫發明のまだ活き／＼として居ることは、實は用言の方が遙かに顯著なのである。従つて是からはもつと後者の觀察に力を入れることが、時代の要求に合ふと私などは考へて居る。中國各地の方言集としては、江草進氏の備中川上郡、千代延尙壽氏の石見那賀郡沿海部、中島信太郎氏の播磨加古郡の採集などが、此後を追うて遠からず世に出ようとして居る。それ等を見比べて更に大いなる刺激を受ける者は、誰よりも先づ此集の著者であらう。私は窃かにそれを期待して居る。

昭和十八年八月

柳田 國男 識

本文順序

(I—14 名詞)

- 1 天象・地形・動植物……………一
- 2 農耕・農具・牛馬……………八
- 3 山林……………二一
- 4 海運・漁業……………二五
- 5 勞働・經濟……………三二
- 6 食物・食事・食器……………三五
- 7 服裝……………四二
- 8 居住……………四五
- 9 村・家・交際・卑稱……………五三
- 10 人體・病氣・兒童關係……………五九
- 11 婚姻・産・葬送……………六八
- 12 神事・年中行事・妖怪……………七三

21	音 訛	一三二
20	副 詞	一二六
19	慣 用 句	一三三
18	動 詞 丙	一一二
17	動 詞 乙	一〇三
16	動 詞 甲	九五
15	形 容 詞	八二
14	言葉の遊戯	八〇
13	事物の状態	七六

伊豫大三島北方言集



1

オカカリ 日食。

ネノホシ 北極星。

オウルイ 慈雨。

ヒカゼ 目がよく照つて強く吹く風。

ダシ 東方の山から吹き出す晩の風。

ハンケ 半年。

ユーヤ 昨夜。中年以上の男が用ひる上品な語である。

サーツイ 一昨々日。

ヒノヌケ 日中。

ヨアサ 夜明け方。

アイサ 平常。

ウネ 山の頂上。小峯をコウネといふ。

テングツ 山の頂上。

トー 山の上、峠。

タオ 山の鞍部。

フカサコ、マテガサコ 地名。山ではあるが低くて凹んでゐる。

ガンガラ 岩石の重疊した峻険地。

ガンゲツワラ 山麓の岩石に満ちてゐる所。

シズ 山地の小石原。昔そのあたりは畑であつた。

ダバ 平地。平らかでない土地に若干の平らかな地面のあるのをいふ。

ゴツポリ 屋敷に近い裏山の小藪などがある土地。

ワンド 洞穴。

ドチ 土地、土地の上。ドデベタ、ドデビタともいふ。

ウワジュウケ 上層は濕潤だが下地は粘土の固まつて堅い所。上層濕地。

ナメラ 砂地の硬化して岩がかつた所で、井戸、タンポ(八頁参照)を掘るのによい。

サーシ 村、山、山畑等の南向きをいふ。その反対はオンデで、これは北向きの意。

オンゴク 村でも山でも最も奥の方をいふ。

クレシ 遠方。

グリ あのクレシー行かれるちゆかい あんな遠方へ行けるものか。

ネバ 小石、ばらす。

粘土。

イタチミチ 最小徑。

チドリミチ 九十九折の様に曲り曲つた道。

デミ 泉。

デミガツク 泉が涌き始める。

カーラ 川。平素は石ころの裸床で、大雨に水が流れる。

ガンギ 海岸の石垣の所々に設けた石段。奥から下へとイチモンガンギ、ニモンガンギ、サンモンガンギと

呼ぶ。

スベリガンギ 前項のガンギは石段であるが、これは石を並べて滑り臺のやうな斜面にした昇降路。

コシツキ 海邊の石垣の腰部に防波用として二重に築いた石積みをいふ。

オキノトナカ 遙か沖の真中。

フカリ 海の深い所。浅い所はアサリである。

テリメンナミ ちやびくと小刻みに騒いでゐる小さい波。

ムスビナミ 三角波。

ブンブリ 水泡。ブンブラ、ブンブル、ブンプロともいふ。

ワエ、ワエシオ 逆行潮。上げ潮の時、地に近い潮水は却つて反對に下へ向つて逆行する、これをいふ。

次項参照。

ホンシオ 満干によつて移動の主流をなす潮。これに對して前項のワエを起す潮をデノシオといふ。

カレツマリ 干満の差の大きいのを大潮といふが、それに對する小潮の、干き切つた時をいふ。

トロミ 満潮タチの極點(大潮、小潮にかゝはりなく)。

タタエ 満潮の状態。これに對應するのがヒソコである。

ヒドロミ トロミに對し干潮ヒソの極點をいふ。

ヒオチ(老) 潮の引くこと。

○

ガナモ 一種の藻。

ホークリボーズ 春蘭、根はあかぎれの藥。

ミヤコモドリ 鳳仙花。

ボテ さるとりいばら。

タジナ いたどり、虎杖。

ズンボナ ちがや。

カントーシ すゝぎ。

オンバコ おほばこ。轉じて處女のこと。

タヌキノローソク きつねのゑふで類。

ホヤ 袋狀をした毒きのこの一種。たゞと中から粉が出る。

ナバ 茸。

タネワタリ 茸の一種。

カシユー つるどくだみ。

マカゴ むかご、自然薯の蔓に生る實。

サルノコシモシ 蘇鐵の實。

ドンドロギ 桑の木。

ドンドロ 桑の實。濃紫色を一般的にかういふ。水泳をしすぎて唇が紫色になつてゐるのにもいふ。

ブイブイ ぐみ。

シャシャア しやしやんぼ。

ツングリ 松かさ。

ガール おたまじゃくし、蛙の子。

ヒゲホイシヨ、ホイシヨ 毛蟲。

モトジ 便所のうじ。

ガンド まめざうむし。豌豆などにわく。

ツミ こくごうむし。玄米貯藏中にわく。

カネブ かなぶん。

ジュクジュクヨシシ つくつくばし。

セミノダンゴ 蟬の幼蟲。

スイジンサイ まい／＼蟲、みづすまし。子供はスミともいふ。

ヘワ とぐろ。

ブス 相手に對し全く無力なこと。例「蛇はマメクジラ(なめくじ)にやブスぢや」

キコリ 眞章魚。大きくてこり／＼する。アナダゴは細長くて柔かい。

シヤゴ きざご。茹でて實を食べることもあるが、主におはじきに使はれる。おはじき遊びのこともシヤゴ

とさ。

アモナ 海にな。幼い子でも容易に多くをとり得、茹でて食べるによいので子供に親しまれてゐる。穀の尻

を小石で叩き、頭から中味を吸ひ出して食べる。

ヨダレニシ かやのみかにもり。是を食ふと涎が出るといふ。

ブンダイ くぼ貝。

スイクチ おほへび貝。

オー おほの貝。

クロモチ しらを貝。

ヒラフ たひらぎ。

ジーンセナ よめがかさ。ヨメノサラともいふ。

スズメガイ くちばがひ。

クラ　ぐんばいほづぎ、長辛螺の卵囊、女の子はこれをほほづぎとして鳴らす。

ドビビニコ　毛も生えてゐない生れたばかりの鳥の子。主に雀の子のことを子供がかういふ。

アトアシ　かもめ。

キート

たこつら

こたけ

マクシヤマ　タヤコノコ

ネヂ、ノヂ 耕地には眞土にも砂地にもネヂ、チューヂ、サンマイメ、ゲサンの四等級があり、ネヂを一

等とする。尙ホンヤマ(二頁)参照。

ナバタ 郷畑。村中又は村外れ近くにある畑。前項ネヂの一段上級であつて特等。これは宅地にもなる。

ゴータ 郷田。村外れ近くの田。前項ナバタに對應するもので、田として一番よい所。

シューケチ いつもじめくしてゐる最下等の畑。シューケルは畑のじめつくこと。なほウワシューケ(二頁)

参照。

フケ 深田。

コナシ 何も植ゑてない休んでゐる畑。「コナシ麥植ゑる」とは夏作なしに休ませてある畑へ麥を蒔くこと。

普通の麥よりも早く植ゑるから特別にかういふ。

シオトリ 新田の悪水路。こゝの樋の番人をヒモリといふ。樋の排水孔の覆ひ蓋をオトといふ。

ミト 田の水の切放し口。そこを切ることをミトキルといふ。

イデ 溝、小溝。田の側の灌水用のイデである。中年老年の者はミソテといふ。

キレト 小溝や小川の流れの切れ口。又田の畔の切れ戸。

タンボ 田の側に設けた灌漑用井戸。この水を汲むのをタンボクム、井戸替するのをタンボカエルといふ。

ハネギ

前項タンポの汲出し装置。井戸の傍に柱を建ててマネキの中央を支へ、マネキの一端には重石、一端には桶(ハネツ)のついたツリザオが取りつけてあつて、シーソーの如く動かして水を汲む。

オンビキゼンチ

野の溜め壺。斜めにさしかけた屋根がある。その形が蛙(オシロイ)の手をついて坐つてゐるのを聯想させるからであらう。

クゴシ、クグシ

草でも木でも何でも集めて焼いた肥料用の灰。

ハデ

稲、粟、そば、芋蔓などをひつかけて干す爲の立垣風の設備。干すものによつて構造が違ふ。稲をかけるのはイナハデ(イナハゼともいふ)。ハデにする柱木をハデギといふ。

フネ

稲刈の時、水田で刈つたものを置く板製の箱。この中で束ねては持出す。

ヤタ

前項フネの代用品。松葉或は櫟の生葉の枝を並べ、くより合はせて作る。

カマ

薩摩芋の貯藏壺。砂地の畑の端などに設ける。土地を掘つて小麦藁などを敷き、上手にかくまつて又藁で被ひ土をかぶせる。

カマイモ

カマに貯藏してあつた薩摩芋。又貯藏する芋。

イモノクワギリ

掘る時に三つ目鎌で打切つたきず芋。

ジーネゴ

燕麥。

コーライ

たうもろこし。

マナ

白菜。

タガバイ

野菜類の蒔かないのに生えてゐるのをいふ。人間でも偉い人に馬鹿な子が、或は馬鹿な親に偉い

作

農

子が出来たりすると、「ありゃあタガバイぢや」といふ。

シロズキ 稲作りの爲の田の最後の仕上げ鋤き。その動詞はシロースル。

ナカヌキ 搗く時に途中で一回糠をぬくこと。斯うすると白げられるのが早くなる。

ワラシブ 稲藁・麥藁の一本。主に稲藁に言ふ。

カギマタ 扱き損ねの稲穂。カギマタには稲の葉などが交つてゐるので、夕方稲扱きの一段落ついた頃、カ

ギマタを目の先に掴み上げては晩の冷たい微風にあはせてふるひながら少しづつ落し、稲の葉を除く。これをカギマタタタスといふ。

ハカマ 稲藁の葉の小片で稲扱きの時などによく出来る。繩綯ひや草履作りの使ひ藁は槌で打つ前に、葉を

ソグル(一〇四頁参照)が、かうしてとれた葉片もハカマ。これは切揃へて便所の落し藁にする。

シーラ 米粒の不完全な出来のもの。

カシラ 籾をすり、麥穂を叩いた時、普通の米麥以外にとれる熟しきらかなかつたもの。

スクモ 籾の皮。

ハクボ 麥の皮。

オテダイ(慶) 藩から來た稲作出来榮えの査定官。大小を差し、陣笠陣羽織を着てゐたといふ。

ツドメ(慶) 籾摺り前に村の庄屋から出る布告で「爾今暫く一切の作物のみものを賣るべからず」といふお達

しであつた。貧の爲に年貢米まで賣るやうな事の起るのを怖れてである。上納米がトノグラに收められるとツドメは切れるのである。右のお達は村の「小走り」が「明日からツドメでございますぞー」と大聲でふ

れてあるくのであつた。

オリカケ(麿) 米が年貢の倍出来ること。摺り上つた米についていふ。「オリカケんなつた、結構なものぢや」と喜んでものだといふ。

トノグラ(麿) 舊藩時代上納米を収めて置く倉をいつた。村の中央にあり、廢藩後は村の諸事扱ひ所となつたが、今は別に公會堂が出来たので殆ど使はぬ。

イレキ(麿) 村のトノグラに御上納米が入ると交替で倉番をやつた。その折、暖をとる爲に焚く木をイレキといつた。

カマアゲ 自家の作り田の稻を刈り終つた宵の鎌まつりの御馳走。鎌まつりとはその宵、鎌を洗つてこれに御飯を供へてまつること、今はもう行事として行ふ家は少い。

カイセンイワイ(麿) 御上納米を納め了つた内祝。

○

トカケ 斗櫛で量る時、量り切る爲に轉がす丸棒。六升櫛でも言ふ。

マスドリ 櫛へ前項トカケをかけること。先方三分をつき落して向ふの端から手前へぐつと引く。「七分三分のマスドリ」といふ。

ハタゴ 二合半櫛。二合半。

ハンナカ 半俵即ち二斗。二俵半は二俵ハンナカである。

カナ 稲の株を數へる言葉。四株はヨカナ、五株はイツカナである。

オダ 刈草、麥類の刈つたもの、豆類の引いたものなどの一抱へ程の分量。小豆、大豆などは右手で引いては左手に抱へるが、一掴みづゝ上下五ひ違ひに抱へる。その左腕に一杯になつたものがヒトオダで、斯くまとめることをオダニスルといふ。

ターラ 俵。俵や菰はコモガセといふ道具で編む。コモガセの織絲とも言ふべき細繩を巻付けて吊下げらるゝのをツチノコといふ。俵にはサンドラ(棧俵)を當てクチナオ(口繩)でかざる。俵の兩端の周圍を繩ですくつて、口繩を引掛ける所が作つてあるが、これをメネクソといふ。

ダツ 荒筵の兩端を縫合せて俵の様にしたもの。除蟲菊を収納したりする料。ダツは一本二本と數へる。

エングリ 稻藁を打つて柔らげたもので編んだふど。前々項の菰ガセで編む。大小色々ある。

テーグリ 肩に引掛けたり手にさげたりするふど(藁製)。畑、山、海などへ仕事に行く時の辨當入れとして利用することが最も多い。

ドンゴロス 黄麻袋。

ホボロカンゴ 極大の竹籠。一本緒をつけて提げる。又二つを天秤棒で擔ふ。

バイスケ 横二尺に縦三尺程の竹製のすくひ籠。石垣を築く時小石などを運んだりする。

ソコカクシ 前出(本頁)エングリの底をやつと隠す程度の荷。子供等が山の荷物について特によくいふ。

ハタ エングリの深さすり切り一杯(上にはみ出さぬ程度)。子供等がいふ。

オンツマイツカ たつぷり一荷。やはり子供等が山の荷物についていふ。

カブリツキ 素手で引提へて肩にかつぐこと。俵其他大きい重い物の場合である。マルカタギともいふ。

ハリモチ 過重過大の無理な荷物を持つこと。

テンジヨモチ 物を昇き棒の上に載せて昇くこと。

ヨテンモチ 四人のテンジヨモチ。

トンボガキ 前二人後一人の三人昇き。

イシワ 石垣用其他の大石を昇くのに使ふ簡単な引掛けの輪、よくかづら等で作る。

タマコ 物を昇く綱の輪。

ニオ 荷緒。三つ組みのかなり大きいもの。大きな荷を馬や車に括りつけたり、材木に括りつけて人手で引いたりする綱。

サス 天秤棒。棒の両端に三つづゝある緒を掛けるいぼをツクと呼ぶ。

オーコ 天秤棒に似てゐるが、棒の両端がかなり長い四角錐になつてゐて、先にかねが巻いてあり、荷束に突刺して擔ぶ。オーコヤサスを製することをコクといふ。

ツイマタ 二本又は三本の棒を一端で括り合はせ、他端を互に擴げて地に立て、その上に横棒を預け渡す仕組みにしたもので衣類、農作物などを干す。

テネソ 山での草刈りの時など小束に括る料。多くは茅のやうなものを二つまみ取つて、根元を先にし互ひ違ひに縫合はせたもの。小束をテネといふ。テネルといふ動詞もある。

イーツ 三つ組みに綯つた丈夫な別製の束ね繩。イーツで括つた物の端をオーコで突刺して擔ぐ。ワライ具 搬

1ソは藁製。コタバイ1ソは特に小束用のもの。ツガイ1ソはしゆる皮製の繩を三つ組みにしたもので最も丈夫である。

ツゲ しゆる繩。

ツガイ 稲刈の時の束ね繩。荒藁の先だけ縛つたもの二つの先と先とを括り合はせて一本にしたもの。

チンチョー 石を昇くのに使ふ鎖。

タンクワ 田を打ち起す、角度の殆ど直角に近い頑丈な鍬。爪は三本爪で長い目である。

チョーナンクワ 木株などを掘起すのに使ふ鍬。幅の廣い厚みのある一尺四五寸の一つ爪。柄は短く握り太で頑丈である。

トングワ チョーナンクワの先の尖つてゐるもの。

ガンツメ 五つの爪の鍬で、土をすくひ小石のある河床をさらへたりするのに使ふ。やゝ短柄で屈んですくつたりするのに便利にしてある。爪は短めで柄との角度小。

ゴンゾー 四つ爪、短柄の小石掻き。

コマザラ 三つ爪の鍬。これを使ふことをコデル(一〇五頁参照)といふ。

テコマザラ 三つ爪鍬の小さいもので、麥の二三寸のびた頃何度かその間をかきさがすのに使ふ。子供がよくやる。


ヒトツツメ 一つ爪の手鍬。テングワ

ササテングワ 一つ爪だがヒツ(次項参照)がなく、たゞ柄にとりつけたもの。

ヒツ 鋏類の爪の元の輪になつてゐて柄を差込む部分。

エブリ 鋤上げた田をこのエブリでよくならして植ゑにかゝる。柄長く頭は横板で齒が無い。田の面をこれでならず役をエブリツキといふ。

キツタテスキ 鋤の殆ど垂直なもの。深行きはせず上掻き用。大豆、小豆あとの落葉を鋤いてかくす料のもの。キリクテともいふ。

ノークリ 適當に彎曲した部分のあるむろのきの、その彎曲した先に形の金穂をつけた溝掻き鋤。麥の上肥などをかけてこれで引張つて簡略に土をかけたリもする。溝掻きは老男の役。

ヘラ この鋤先のこと。昔は使はぬ時は油で拭いて納屋の隅に引掛けてしまつておいた。豆腐などはで焼いたりしたもの。

イザキ 牛馬に引かせる鋤の先へ前項ノークリの先をつけたもの。

テツザキ 前項イザキの鋤先の幅が三分の一程のもの。これは土地の鍛冶屋で作らせる。ノークリの鋤先などは既製品を買ふ。

マンゲウ 馬に引かせて田を掻くもの。細長い四角錐の爪が十本内外も取りつけられてゐる。

サネクリ 綿の實を除く道具。

カキヤ 木の大槌、かけや。杵を打込み又新築の建前に用ひる。

ケンド 篩。

ツツラケンド つゞらぶぢで製した荒目の篩。モンドーシともいふ。

ムギモンドシ 麥穂を連枷で叩いたのを唐箕にかけ、その次にかける飾。竹製と金製とある。

トニコ 箱作りの飾。そばなどひいた時よく使ふ。

ナデギノ 手杵。テギノともいふ。

カラウス 石製のハサミへサオをとめつけ、サオの先にキノがついてゐる。

ヒキミシロ ひき臼に敷く圓形のむしろ。繩製で周圍がはね上るやうになつてゐる。

カルサ 連枷。



ヨウジ 極上牛、最良牛。

カツバ 老牛。

コツトイ 牡牛。

オナミ 牝牛。稀にメナミともいふ。

アカバ、アカパウジ 赤毛牛。赤と言つても赤味を帯びた褐色のこと。

スジアメ 牛の毛並で黒の中へ赤い毛が筋様に入つてゐるもの。

シリガイ 鞆であるが牛のものにいひ、馬具ではエビといふ。

ホーダマ 牛馬とも素裸では捉へ所が無いので、細引紐でこのホーダマを伯樂に作つて貰ひ頭部にはめ込

む。喉、鼻先、頭上等に絡むやうに編んだ框状のもの。オモガイと呼ばれるものは、これより丈夫に出来

てゐる。

ハナグリ 牛の鼻孔に通す輪。むろのきの小枝を曲げたもので、是に綱をつけて牛を追ふ。これを始めて突

通す時は伯樂にして貰ふが、以後は銘々で取りかへる。

ツノヨセ 角の格好を直すために繩などでくくり合はせること。

アセ 牛への號令「左へ向け」、「左へ曲れ」。ハナグリにとりつけた手綱を牛の右側面にとつて後方から追ふ

ので、アセの時は號令と共に手綱を牛の體に當てる。アセイ、アシヨイともいふ。

シヨリ 牛の發情。

トンコツバ 屠牛場。

ホロ 馬の愛稱。呼掛けには「ホロ〜」。

バーバ(兒) 牛の愛稱。

ナレ 老馬。

キンマ 瘦馬。

コマ 牡馬。

ダンマ 牝馬。

カヌカゲ 鹿毛の赤毛へ白毛の交つたもの。

シラカゲ 腹毛は白く鬣と尾は黒く、他は普通の鹿毛の通りのものをいふ。

ヒクルゲ 栗毛の別稱。

キンクリゲ 春先毛替りの時光る栗毛。

シラクリゲ 腹が白い栗毛。

オバナクルゲ 栗毛に白毛の點々と挿毛のやうになつてゐるもの。或は前髪^{ノド}の被つてゐる部分が白く、尾が少し白くて他は栗毛のものとも言ふ。

カールケ、カールケ 白の汚れた様な色合。脚くびと鬣とは黒い。

カモカールケ 鴨の色の馬。但し膝から下と鬣は黒い。

ツクゲ 眞白のもの。

シブツクゲ 底白くて上表が褐色をしたもの。

ヒバル 枯木色のものとも、外觀は全體黒くて、たゞ耳の中の毛に灰色の混入してゐるのを言ふともある。

チョーブタイ 馬の額の白い斑點(多くは縦長い形)。

ナガレチョーブタイ 鼻先の邊まで白斑點の流れて長いもの。

シュータブラ 荷駄馬の鞍のクラボネの下側に固着してゐる藁製のもの。これだけでは固いのでとりつける時馬の背にドージキを敷く。

エビ しりがひのこと。眞赤な皮製でその形状からこの名を得た。エビと鞍とを連繫する紐には木製の管が幾つも通してあつて體當りが軟かなやうにしてある。

タワイ 前項エビに續く管の下側に敷き當てる尻當。絲で編んで作り、兩側へ二尺程ばらりと繩のれんの如く垂下るやうにしてある。黒又は紺色。

オイヅナ 手綱。

ハチ 「左へ行け」「右へ行け」。馬の後からかける號令で、左右同一であるが、手綱の合圖で區別する。

トレ 「脚を上げる」。蹄鐵を打つ時、伯樂などが脚を見る時、踏んでゐるものを取らうとする時など。

ンマイツカウ 馬に耕作をさせること。

リキフミ 駄屋の中などでどち／＼足踏みする癖の馬。

サビル 荷を振落す癖のあること。動詞。

ユルギ 常時やたらに首を振る癖のあること。馬にも人にもいふ。

キカブリ 駄屋の中の木をかぢる癖の馬。

ハナイン 馬の口元を捉へようとする、いひんとばかりにイギル(小暴れすること)。

ホドロ 馬飼料の一。麥穂の芒も實も落した後のもの。

ヒゴ 大豆を連枷で打つて收穫した時に残る莢殻で莖のこぼれなども混つてゐる。牛馬の冬の飼料。このヒ

ゴ置場がヒゴピヤ(四五頁参照)である。

コガス 小麥を挽いて粉を製する時のかす、鶏の飼料の最上等のものとしてゐる。

トーザイ 一歳の牛馬をいふ。トーネンゴとも。

シヤク 馬では四尺、牛では三尺を單位とし、これをシヤクと呼んで、背丈をいふにシヤク以上の所を「二寸」

とか「三寸」とかいふ。

セゴ 牛馬の背中。

ホロ 牛馬などの圖體。荷物などについて言ふ時はその大きさ。

ネジガエ 飼主と伯樂とが牛馬を追金なしでそのまま交換すること。稀には物を無條件にその儘取換へることにもいふ。

チカタ 大三島では四國(主に伊豫路)をチカタと呼ぶ。伯樂など牛馬の取引を島と四國とすることが多い
關係上よくこの語を使ふ。

ホンヤマ 普通の山。これが山地として第一等で、これをネヂ、チュード、サンマイヌ、ゲサンの四等級に分ける(八頁参照)。

スナヤマ 第二等の山。

タチヤマ 第三等の山地、櫟林になつてゐる。

アラバタケ 第四等の山で、作つてゐた田畑を山にしたもの。

ヤンザ、ヤンド 山や山林の掃除が出来ず、灌木、羊齒等の亂れ茂つたもの。

ヤンザタオス 「ヤンザ倒す」で、山掃除の大仕事をよく言ひあらはしてゐる。

オーヤンザ ヤンザの酷いもの。オーヤンドともいふ。

クイヤンザ いばらのヤンザ。

クイゲロ いばらが密生して相當大きい固まりのやうになつてゐるもの。

タテキ 山林中の目ぼしい樹を、外の樹は伐つても伐らずに育てて生長させたもの。賣る爲のこともあるが先づ自家用の建築材としてとつて置くのが常であつた。或は贈物にも。大きなタテキを伐る時には御神酒を供へた。切株の側へは常盤木を立て、暫くは切株へ上らない。

アヤギ 薪にする雑木、灌木類。アヤギはこの山のを採りに行つても天下御免である。刈草も亦同様。

ツメカブ

鎌の柄程の小株。チヨウナングワ(一四頁参照)でオクス。株掘りに行くのは何處の山でもよいのだが、むろのきの株だけは如何にツメカブでも他家の山のをとつてはならぬとされてゐる。

ウイソージ

山の初掃除。

チヨウナハジメ

山の伐りはじめに山主(後出)が柚人(オウジ)に酒一升おごるが、それを柚人が山へ持つて行つて燗して飲むこと。

ナカイコ 中途での一杯。

ヤマジマイ 打上げでの祝ひ酒。

チヨセ、チナラシ(廢)

地割制度で十年或は二十年毎に田畑の組地換へをするのをいふ。この年限を一代といふ。

ヤマナラシ(廢)

前項に對し山のチヨセをヤマナラシともヤマジヨリヨともいふ。但しこの方は四十年が一代で、これをナラシ一代といふ語がある。

ダイガワリ(廢)

ナラシ一代の代が改まること。その時、立木にキリコ(切傷)を入れて一代を経た目じるしとする。その木が代木なのである。代が重なるにつれて一代木、二代木などと呼ばれるものが出来るやうになるわけである。

キリコ

キッカとも言ひ、木に切傷をつけて代を示す印とする。

ソマド

柚人(複數)。

ヤマコ

山を買つた人。

ヒキヤマ 平らな所に三尺近くおいて一對のツイマタ(二三頁参照)を打込んだもの。この上に割木をのせて挽

く。割場にはこのヒキヤマと割臺アルサが設けてある。

コワ、コワイタ 木材を板に挽いた残りの皮付きをいふ。

ズプロ 割木の長さ二丈フタタケのもの(三尺二寸程)。

ズプロモクル ズプロを上の方から下の割場へと抛り下すこと。

ソベラ 割木に割る時に出る割片。ソエチギレともいふ。

オラサキ、ウラサキ 用材をとつた先の薪にするところ。

ホタ 櫓。割りきれない立木の大株。餅を搗く時の糲を蒸す用などにそのまま焚く。

ネト 根元。

ヒコネ 樹木の立根から枝生してゐる大きな横根。

シラネ、コジラネ 前項ヒコネに密生してゐる小さな根。

ホーサ 櫓、こなら。

ナリキ(老) 果樹。

トシギリ 果樹が前年よく生つたため、當年は生りが目だつて悪いのをいふ。「此柿の木やトシギリ―せず

に毎年よう生るのう」「今年ゃあトシギリぢゃけん、えつと(澤山)生つとらんわい」など。

ミテクレ 外見、恰好の意だが、果實についてよく言ふ。

キマブリ 果樹を採る時最後の一箇だけは木守りとして残しておく。成可く高い所の、而も出来の悪くない

一箇を残す(一〇三頁参照)。

ギオンボ 柿の一種、祇園坊。

ネーブリカン ねいぶる。

ハツリ 木挽の持つてゐる大斧。柄もかなり長く、大きなモーションで使ふ。

「ガンドノコ 一番荒目の大鋸。木を挽切る時などに用ひる。

「アヤガマ、 アヤギガマ 山仕事用の丈夫な双の厚い鎌。アヤギ(二二頁参照)。

ノボリガマ 枝を打つための彎曲のあまり無い鎌。

ナガエ 高い所の枝を落とす鎌(主に松の木)。エナガともいふ。

キノボリ 木登り用の一本梯子。大きい材(竹がよい)一本の兩側に交互に足場フミガをつけたもの。

ダルマ 船の型の名。これはワゲドモと稱して艦を高くし追波をくはぬやうにしてある。

イトサガリ(古) 前項ダルマと構造は同じだが先頭へ澤山の房を五尺程垂れて派手にしてあるもの。ヤッコ

ともいふ。

ホーリヤゲ みよしの形が巻上つたやうになつた船。

ダンベ オワリダンベともいふ。船首をとつて除けて格子のやうにしたもの。

ヤイトブネ(廢) 蒸氣船。

バツテラ ぼうと。

キタマエガヨイ (1)北國通ひの船。馬關廻りと仙臺廻りの二つがある。(2)老人は帆前船を見ればかう呼ぶ。

キタマエブネともモトブネとも言ふ。

ホースブネ 屋形の無い船。

スマントヅクリ 肋骨造り。

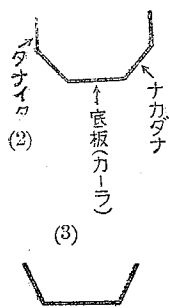
マツラヅクリ 純和船風な小舟の作り方。スマントヅクリでないもの。底板

の形は挿繪1の如く、横断面は2の如し。

サンマイヅクリ 底板と脇板とより成る長方形の船の作り。横断面は挿繪3。



(1)



(2)



(3)

カール 船底の川原板。

ナカダナ カールとウワダナとの間に斜に繼がれた板。古くはカジキと言つた。

ウワダナ タナイタともいふ。マツラ造りの横斷圖參照。

アオリ ウワダナとナカダナとの繼目の所にあるすぢ板(小さい船にだけある)。

ウワズリ 船體の兩側、外板の上部に打つすぢ板。又少し大きい船の場合は、兩側外板上部の、人が歩き得るやうになつた部分。

スジガキ 渡海船などでウワダナの更に外部に裝飾的に並べて張つたすぢ板。波防げ用になる。

サシイタ 小船でウワダナの更に上に板を立て繼いだりする。この板をいふ。積荷の落失を防ぎ、波防げにもなる。

カイセンゲ 黒船クロフネと呼ばれるやうな大きい和船では、波防げのサシイタを斯く呼ぶ。

ペンコ 船の外板にする杉の用材のあら木。この村へは主として日向、次に紀州から來る。

オードコ 舵をあてがふ横木。

スイタ 船の底に敷き並べた座板。

ダブリ 船に溜つた水を抜き落す栓。又風呂の水抜き栓。

アカ 船へ漏れ入つた水。

アモズ 船にたまつた雨水。

オードコ 艫の舵をかませるやうになつてゐる木。

ヨコガミ オードコの上に鳥居形に立てたもの。高葺き(次項参照)に任用。

ホムネ 船の板葺きをジョードマ、ヤカタと言ふが、ホムネはその板を葺き並べる爲の棟木に當る。溝がついてをり、板の一端をここに引掛けては兩側に垂らし並べる。葺いた状態をタカブキといふ。

カク 帆柱を立てる爲の一番底のとまりになる木。これに四角な穴が明けてあり、こゝに帆柱の根元をさしこむ。カクは底板(カキ)にぶつつけられてゐるわけ。

シャタツ 帆柱の根を抱へる二本柱。

ツツ シャタツに對して船の後部にあり、帆柱を後へ倒した時に最後に支持するもの。

フナダマサン 渡海船以上の大きな船が建造された最後に、棟梁が木で賽(サ)を作り之を艦(ネ)のツツ(前項)に入れ込んでまつる。外からは見えぬやうに埋め木をしてある。賽は棟梁が「天一地六、表ミヤワセ艦シヤワセ」と唱へてまつり込む。祝儀の少い時など棟梁が埋め木の上をたたくと、その船の仕事は繁昌しないと云はれる。船玉さんは一人坊主と一人女を嫌ふと、船靈さんが暴風の前など音をたててお告げになることをフナダマサンがイサムといふ。

カムロ 大きい貨物船などで乗員の起居する部屋。艦にある部屋構へである。

ホダチ 船の艦に設へてあるちよつとした寝る所。その天井に當る板張りの上で艀を漕いだりしてゐるわけである。

サブタ 前項ホダチへの出入口が板張の一箇所に四角に開けられてゐる。これにかぶせる四角な蓋がサブタ。又船のおもてにある道具の入れ場の出し入れ口の四角な穴を被ふ蓋もサブタである。

カチツカ 舵を廻す取柄。

ラット 操舵機。昔のカチツカに當る。

テーコロ ポロッコともいひ滑車のこと。帆柱の先端のポロッコをセミといふ。

スクリ 檣材の鮑屑で綯つた繩。船のともづな等に使ふ。

シユモク 船を押し動かす時に突張りにするもの。脇の下にはさんだりする。

ハツカ 纜の端につけた頑丈な鐵の鈎。

ハツカツキ 先に鈎がついてゐて突張ることも引くことも出来る水竿。

ミツハズ 船の飲料水入れ。四斗樽大。隅に汲取口の圓孔がある。

アイメ 道板。大小いろいろある。

チャリト 海圖、カイショージともいひ、古老の言ふには東京長崎間ぐらゐの港、暗礁、深度、山名、島

名等を説明したものだといふ。

ボツク グレンともいひ起重機のこと。これが無いと大きい船の帆柱は立てられぬ。

リンギ 船をたでる時の下敷にする角長い木。

タデバシ 船たでに使ふ火箸。一本もので木製。長九尺、周圍三寸程。アヤカリをこれで追拂ひもする。

マツエ 帆布の名。

チヨーチヨイボ 背から眞直に風の来る時の帆の置き方で、前後二枚の帆を左右に分け向けるやり方。

ワキオイテ 横順風。この時は片帆にする。

ハリスデ 船の進路。

シオタルド むき潮の所でやすむこと、船が順潮を待つこと。

レイフ 強風の爲或程度まで帆を下げる事。その時は風によつて「一段レイフせい」「三段レイフせい」などと言ふ。

クドカチ おもかぢのこと。モーカチともいふ。籠の在る方向にあたるので斯く言ふ。

ロカチ とりかぢのこと。艀舵。クドカチ、ロカチ共にヤマカク(素人)に言ふ語。

ヨソロ 船を眞直にやれの意。ヨソラともいふ。

ヨバシリ 夜通し船を走らせること。朝の三時が最も眠い。

カワイレ 船を港に乘入れること。

ヒトジョーゲ 一航海。

コガシ 鐵船の解體作業。

サクジ 船の修繕。

テサクジ 船底板の繼目に楨皮マキハダをつめ込んで漏水を防ぐ作業。自分でやる。

コサクジ 一寸した修理。然し大工にかける。

チユーサクジ 中程度の修繕。

コガヤシ 古木を使つて而も殆ど造りかへ位の大改造。悪い板は新調して一見新造船の如くなる。

モツソープネ 大きい脚の強い船二隻を並べて横木で括りつけ相離れぬやうにしたもの。沈没船を吊上げる

時には是を用ひるが、この作業は危険だといはれてゐる。

ウンジョー 水産上或は海に關する年貢のこと。「貝掘るウンジョー」といへば他部落の者が貝掘りに來た時取立てる料金で十錢見當のもの。

ミツアゲ 荷物の陸揚げ。轉じて賣上金額の意にも用ひる。「どれだけミツアゲタ？」等と聞いたりする。

セドリ 陸揚げの通ひ船作業。動詞はセドルである。

カタフネ 僚船。リニューセンともいふ。一度心安くなつたり道づれになつたりしたらリニューセンである。近

くの僚船は「カタフネニー」と呼び、遠くのは「カタフネニョーイー」と呼ぶ。

センドー 船長。

オヤヂモン ボーシンともいひ、支配人、指圖役のこと。

コガタ 上廻り、雜役。

カシキ めしたぎ。

カコ 船をおす仕事の手傳ひ人。オヤヂモン、コガタ、カシキ、カコをフナガタといふ。

ウワノリ 且那の代りにその且那の船に乗つて積荷の責を負ふ番頭などをいふ。

カヂコ 漁船の手傳ひ人。船をおしたりなどする。

カベリ 頭に桶をのせた賣魚婦。その動作をカベルといふ。

モグリ 潜水夫。

カッブ もぐり服の頭部。

フナトンビ 船賣買の仲介業者。

アジロ 好漁場、主に釣場を言ふことが多い。

モダナ 藻の生成してゐる所。

モバキリデシマ 藻切り傳馬。ここに言ふ藻は「龍宮の乙姫の元結の切外し」である。

モバン 藻を抜きとる挟み箸。小竹二本を括り合はせて作る。

ウタセブネ ウタセをする船。ウタセとは船で横風をうけつつ退き、あまり地に近くならぬうちに網の兩端をとり寄せてひき上げ魚類をとること。

ナダウタセ 二本柱の大きい船で、沖の灘あたりでウタセをして主に鯛をとる。

モウタセ コアミとも言ふ。藻棚でウタスもの。小魚類ジヤコをとる。

タコブネ 章魚積み用の生簀のある船。

ペンドロ 章魚船の帆柱につけた章魚船揺り用の錘。この錘をゆすぶつて船を絶えず横ゆれさせる。さうしないと章魚同志がひつつきあつて喧嘩するので。

テマガイ

純粹の労働交換。食事は銘々に用意する。

クリキ

勤勞奉仕。時には單に寄附のことも。又大勢のもの力の意。

メーメイノギ

自分のことは自分でして、人に手傳つても貰はないが、手傳つてやりもしないこと。

シゴ

麥のシゴ等といひ、農耕、作物の世話などの意。

カワイケ

村の港の浚渫。村人の出役であつた。

テータ(廢)

手帳。手帳のこと。公的な語であつた。昔は村の出役人夫を宰領する人などが持つてゐたばかりである。

○ कोरोク

合力と書く。勞力扶助のこと。

कोरोクド

合力衆。

ヒトタテ कोरोク

山へものを取りにゆく仕事など一往復の合力。コイロク

クイデノ कोरोク

自宅で食つて行つてはする合力、又手辨當の合力。

エンノヒタノクワズカイ

(1) 勞して效なし。無駄骨折。動かぬに定つてゐるものを無理に肩にあててみたり

すること。(2) 難しくてしようにも出来ないこと。

オーダテ(廢)

參觀交代の務めに人と船と出ること。ありつたけの船が皆出る所から「大立」の意かといふ。

ウチアゲ 仕事が完成した時の振舞。親方が出すことも銘々で出し合ふこともある。

シキリ ためてゐた支拂ひを一時に切りをつけること。又支拂請求書。「シキリが来た」などと主として拂ふ

側からいふ語。

テソク 手間賃、口錢。

タソク 金の足し前。

テタタキ 收支ちよつきり。仲買が買つて賣つて一文も儲けも損も無い時など。

ヒヤイ 利子。

テツバ 皆に分けての餘りを又頭分けにすること。餘つて仕方のないものを處分すること。

メオイ 銘々で出しあふこと。

シヨーセン 昔の銅の穴明き錢。エーセンともいふ。

ガラセン ナベセンともいひ、鍋と同じ金屬で作つた穴明き錢。昔は一文に通用。

シモタヤ 無職の家。旦那衆暮し。

チコナリ 僅かの年數で僥倖を得て財産家となつたもの。

カブモノ 昔からの財産家。

ウスナベジョタイ 小裕福な口の奢つた世帯。

フクロジョタイ 袋で一升づつ買ひながら暮すこと。

アタコナシ 持堪へ性のない者、持物の愛惜を全く知らぬ人。亂費者、持物を直ぐ失くし、いため、又は飽

きて捨てて了ふといふやうなのをいふ。

エンコハダ 金が身につかぬ性の人。エヌコ(七五頁参照)は鐵類を忌むからかういふ。

モチハダ 持物(食物でも何でも)を大切に長く保存する性質の人。

ピンホーシ 貧乏人。物持がけなしていふ語。

シヤシヤリナシ 貰つたもの、買つたもの、何でも保存せず費消してしまふ人。

カナシガナシ かつぐ。人のすることもせず、人の食ふものも食はずにやつとやつてゆけること。

カツニョーマイ、カツヌマイ 村の人々から集めて、貧苦の者に分けてやる施米。

セチベ、セチベクツ 人のすることもせず、食ふものも食はず、當り前の交際もしないでけちくする人

のこと。

イキチビ 前項セチベに同じ。すべき交際もせず、しても少ししかしないやうな者。

チンネー、チンネクツ 吝嗇家、しみつたれ、横着者。

ホチ 米飯のしんのあるのをいふ。

コガリ ヲゲのこと。子供の折、他家へ御客になつて行つて表などで遊んでゐる時、飯炊きさんから是を買つて食べながら歩いたりしたもの。

イリオケ そら豆を炒つてそれに小豆も加へ、米にまぜて炊いたもの。

スモジ モリスエと稱する長大な淺箱に一杯白飯を入れ、酢加減をし、ぐを混せて押付けて固め、後庖丁で二三寸角に切取つて食べる。時にバラズシをもスモジといふ。

スリコ 小豆、南瓜、團子などを味噌で煮る。今はない。

カモチ 薩摩芋を煮てすりつぶして作つた餅。中に餡を入れることが多い。外に黄粉をつけたりもする。古來のこの宵には必ず是を作る。

ユダメ 平鉢、桶などにざつぷりと湯を入れ、その中にゆであうどんを入れたもの。

センボンズキ 平鉢や桶に手打のうどんをユダメ(前項)にしたものに、三四人もが一緒に寄つて箸をつけ、各とお椀にだしを入れたのを持つてとりこみ、共に食べるのをいふ。村で古來よく行はれる名物である。是に對しうどんやの様な一人々々のをボツカケといふ。

コクソジル 大根、人參、牛蒡、里芋、蒟蒻などを味噌で煮たもの。大晦日の晩は是と麥飯とがきまりである。

る。これは正月の神様の祀り始めだから今でも必ずやり、麥飯にしなければ麥粒幾つかを混ぜる。
ギンザミツ、ギンザンジ 金山寺味噌の事。

ヒシオ 日光熱によつて醱酵を早めたおかず用の味噌。製法は醤油を作るのと大同小異。

シケシラズ 白豆腐へ醤油をかけたもの、奴豆腐。

ヨドーフ 大豆粉を煉つて薩摩芋のやうに丸め、輪切りに切つて煮たもの。

ゴジル 大豆粉をばらのままで汁に煮たもの。

ニボシ 多くは豌豆(青そら豆も)を煮たもの。田植の中食のおかずとしてつきもの。

ワリナ 里芋の莖を割つてほしたもの。

コケラ 薩摩芋を輪切りにして干したもの。イモンコ、カンコロともいふ。

スゴケラ 前項のコケラばかりを炊いたもの。主食代用である。

ヒシタムコ うどん粉を煉つてのばして菱形に切り、茹で、餡又は黄粉をつけたもの。

イリコ ハツアイコともいひ、玄麥を炒つて粉にしたもの。茶で煉つて砂糖を混ぜて食べる。

コシコ 漉し餡。

ホトギ 炒り豆(そら豆や豌豆)。子供はガリと呼ぶ。

テシヨイ 自家製醤油。一番テシヨイ、二番テシヨイなど言ふ。

ダル 味噌、醤油を作るために大豆を煮たその煮汁。煮た大豆と麴と鹽とを調合する時、柔める爲にこのダ

ルを使ふ。

ドーザ 醤油の表面に浮いた白いもの。ガンドともいふ。

オゲ 麴のハナ。

リシ 米のとぎ水。

オトコミツ 男水で硬水のこと。軟水はオナゴミツ。

○

コチャ 晝飯、晝。

ヒグラシ 晝過ぎの飯、晩茶と夕食との間即ち五時半から六時前頃に食べる。日の最も長い時節に。

ゴジュブン 御飯時。上品な語である。

「ゴジュブンでございますか(老)」は、夕景、食事時間前後に訪問して門口に入る時のあいさつ。主として青年が金品を持寄つて變つた御馳走をして食べることに言ふ。(2)月經(慶)

ベツナベ

ホンゼン

が高膳に据ゑられたもので、上流には二ノ膳がつく。圖参照。ヒキモノ附。

オヤワン 白飯を盛る。蓋附。

オヒラ 七種又は九種に慣行せられた煮メを盛る。慶弔の別あり。

スサイ スサイ椀に盛る。慶事には大根なます。佛事には大根の酢和へ。



前手

イケモリ 上流ではスサイをやめてイケモリにする。佛事には寒天のイケモリ、慶事には刺身。イケモリザラにはタメ(醬油の入つた壺皿)が載つてゐる。

カイセキ 慶事用本膳の真中に來る料理。一つ葉を或る大きさに切り其上へ奈良漬を二片載せる。

ツボ 弔用本膳の中附。祝儀にも用ひることがある。麩を葛で煮たもの。上流ではイソワラビ(蕨の飴煮)或はヤマワラビ(タカサゴ、切昆布の砂糖煮)を用ひる。

ニノゼン 上流以外は略される。チョク(右)クワシワン(左)が平膳に載つてゐる。

チョク 上の開いた茶碗のやうなもの。百合根の白和へか青和へを入れる。

クワシワン ニノ椀で慣行により七種の煮メを入れる。蓋が内へ重なる。慶弔の別あり。

クワイセキゼン テシヨ(小皿)二個、ナカヅケ、大皿・刺身皿の五つが膳につき、別に吸物椀が出る。

吸物椀 切魚、カシワ、淺蛸の何れかを用ひる。

ナカヅケ 小さい深い器で、これによく用ひるところ汁をコーノイケといふ。

サシミノケン 刺身のつま。

テイヤ(老) 菓子類。

ホシナオシ 保命酒。

キコン 氣隨(よい意味で)。酒など何卒お宜しいやうにお酌み下さるといふ時、「キコンにつきつつかあざれ」といふ。

サシチャ 番茶。人にすすめる時の謙辭。

ウメチャ 湯呑に梅干一つを入れお茶をかけたもの。旅、殊に船旅に出る時、朝食又は出發直前の食事にかかる前には是を頂くと一路平安であると。

ジユクシヨフル、ジユク いやしんぼ。變つた美味しいものだと思腹に相談なく幾らでも次々と欲しい。人の物、他家の御馳走を立見したりして物欲しさうにする人はいふことが多い。

ズイトワル 同右。又御馳走をしてゐると、あれもこれも人より先に食べたがるのをいふ。いやしい子供など。

アメカゼ 何でも嫌ひなものなしによく食べる人。

クイヂロ あれこれと食ひ食ふ者を卑しめていふ。多く若い男にいふ。

クイタラヨシノカゼヒカズ お腹さへ出來てゐれば後はどうなつても構はないといふ、食ふ事はかり考へてゐる呑氣者。

シヨクタイ 食過ぎの食當り。

ユーシヤリ、イシヤリ 味覺をそよらぬ事。

○

クイゴキ(老) 飯茶碗。極く稀にしか聞かぬ。メンヂョコ、クイヂョクともいふ。チヨク(三八頁)参照。

ネコノロキ 猫の茶碗。

キビシヨ 急須だが醤油入れに限る。

シヨイコガ 醬油を作る桶。

オービラ 煮たものを入れる木製の鉢で、直径尺餘。赤色或は内赤外黒で蓋がある。鉢臺へのせて宴席に出す。この中から料理をとりわけて一座の客にすゝめる。

ハンギリ 大釜から飯をとりあげの大桶。徑二尺五寸位。ヒラハンボともいふ。

モリスエ すしなど作る長方形の浅い箱。蓋もある。

モロブタ 前項モリスエの短いもの。内輪で食べるすしを入れたり搗いた餅を入れたり用途は多い。

テツケハンボ テカゲ、チャカゲともいひ、シゴ(四一頁参照)が一本だけ長く出てゐる手桶のこと。この桶はすぐ食べるもの、その他きれいなものばかり入れるので桶の中では最も上位に扱はれてゐる。子供が氷を張らせて食べようとするのはこれである。

ナキリハンボ 直徑二尺内外の洗桶。野菜類を洗ふ。

ツノハンボ センハンボともいひ、五寸に八寸の小判形の桶で高さ四寸、兩端に角ツノの如くシゴ(四一頁参照)が向ひ合つて出てをり、蓋押への栓がこのつこの穴に差通される。田畑へ飯を持つてゆくのに専ら使はれる

(今は稀)。

ゾーバチ 魚桶。前項センハンボを大きくしたやうなもの。

コガ 大桶。磨いた糯を浸しておいたりするもの。

ミツダル 二升入、三升入などあり、船で出てゆく時、雨乞に一晝夜ゆく時など、水や茶を入れてゆく。竹の栓がしてある。

シロ 桶の木組の一片々をいふ。

ワツバ 朱塗り楕圓形のわけ物。辨當のおかず入れである。

ヒロボン 祝儀用のもので、肴を入れたドンブリを五つ並べるのが正式。

ヒタミ、ヒタメ めしかご。

テジタミ 取手のついたヒタミ。

スズマシ 角形で底に大きな目が粗くあいてゐる、取手のついた籠。よく油揚其他を入れておく。

メコ 羊歯の莖又は竹で編んだ食器入れ。

トージカゴ 小さくて長形のうどんを温める籠。角力の時鹽を入れておくもの。

ゴケ ハンタモンともいひ、食器の數不足のもの。十人前とか廿人前とかが單位とされてゐる。

メンキリ うどんを打つてたゝみ、一筋々に切る特別の庖丁。

ハガマツカミ 藁草履様のものを二つ連結したもの、ほうろくを掴むにも使う。

マナバシ 二尺程ある料理用竹箸。紐で連結してある。主にうどんを茹でる時のをいふ。又魚焼きに用ひる。

マワリ(老) 搗粉木。一般にはデンギといふ。

タモイ(女) 大切にしてゐる他所行きの着物。

ソブツ よその子にやる産衣。

ガマンカクシ 入墨かくし。夏用筒袖の紐つき襦袢。木綿又は縮み製。ガマンとは入墨の事。

ドンザ あれこれの布片を継ぎはぎしたごつごつの着物。袷や綿入りあり。

コンツ 紺の木綿地。今は無い。

ヨリコ 黒絲と白絲とを釣り合はせたもので織つた布。百姓のシャツ、ズボン等を作る。

エドハラ 幅廣い紐が背中で十文字になる。舊幕時代に火消しの着てゐた腹當と同じもの。

キングワムナカケ 菱形の老爺向胸掛け。木鍬キツクの形に似てゐるのでこの名がある。

フンゴメ(老) ちばん。

サシコ 足袋の表面を絲で縫ひつゞしたものの。

コーカケ 手覆。

ユテ 手拭。主に子供が用ひる。やゝ品がよい感じの語。

フカオリ ツマオリガサともいひ、周圍を四、五寸折下げた菅笠で、秋祭の獅子舞行事の奉仕者の一部がかかる。祭の夜に編まれるもの。

ネプト 竹の皮の笠、雨降りに使ふ。タキワラバチとも言ふ。

ヒツクリカヤシ 竹の皮の白い方を外にして編んだフカオリ笠式小型のもの。

テシカラボシ 何も被らず頭を暑い日光に曝してゐること。

トシボジョーリ 藁草履の前鼻緒の部分が蜻蛉が翅をのばした形になつてゐるもの。

下品とされてゐるが實用向で堅牢。

フジクラ 淺草草履。もとく雪駄のこと。

ドジマ 下駄のハマ(齒)の後だけあつて前はぼつくりのやうになつてゐるもの。

クワンコ 下圖の結紮法をいふ。二重輪の中へ締めるべきものを置く。

コ 絲紐などの一重二重三重や、一輪二輪……をヒトコ・フタコ・ミコと數へる。

オッコイスビ 上圖の結び方。

ガンジ 前項 オッコイスビをしつかりと締めたもの。或はオッコイスビを更に何回かして固め

たもの。ガ ンジガラメはこの強意。

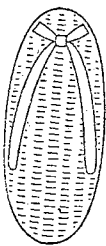
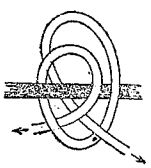
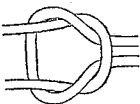
シリブテ はね。はねが上ることをシリブテがスルと言ふ。

ウチバン 大きい丸木の切口を臺にして、木綿ものの洗濯したのを疊んで載せて艶出したる。その臺を

540。

スイシ しんし。

タカハタ はた織り機械。



ザグリ 框に絲を卷取る器械。

ヘバタ 綜ばた。

ヤハズ 箴へ絲を通すのに使ふ道具。

オスネ 膝（膝）へタテイトを卷取る時に、その縦絲の亂れぬ様にあてる一尺許りのへら竹。

ヒコジリ 膝（膝）へ巻くタテイトの一方の端はヒコジリと稱する二股の木にとりつけてある。股の上に石をの

せ、膝（膝）に巻きとる程づつ是を引張り寄せる。

トンボグルマ 梭の中に挟む管絲を卷取る道具。

キビヤ、 キゴビヤ 薪小屋。別に一軒小さいのを建ててゐるのをいふ。

グロバ グロ常設の場所(多くは河原の土堤の村地面)。グロとは薪や藁などを、一本の埋め柱を中心にして周囲から丸く積重ねたもの。中心の柱の無いこともある。

ヒイラス くら、土藏。

カタマ 納屋は通例主屋の向つて左に建つてゐる。その手前端的物置部屋がカタマ。

ダヤ ウツシャともいひ、納屋の真中にある牛馬部屋。

ウツシャノツチ 牛馬部屋の二階の藁置場。板張りなどしてない。

ハガイ ダヤの中央にある二尺位の牛をつなぐ杖。

ハンヤ 納屋の最奥の部屋、堆肥室になつてゐる。この二階も牛屋ウツシャと同様ツチで、藁を収納する。ハンヤノツチと呼ばれてゐる。

ヒゴビヤ 大豆莢などの牛馬飼料の置場。前項ハンヤの入口の右手に作つてある。部屋ではない。ヒゴの條

(一九頁)参照。

オテ、 オテモーリ 家の周囲、ぐるり。

ホーリ 家の向き加減、又物の曲り加減。ホーリがエ、とかワルイとか言ふ。

ゾクヤ 平屋。ゾクヤダチは平屋建ての意。

カンド 家の前面にとつてある空地で、農作物や取入れた糞かものなどを乾すのに使ふ。多く漆喰にしてあり、してないものはドロカンドと呼ばれる。

イヌフセギ 表の雨戸、板戸。「イヌフセギひてうけ渡す」とは、請負つて雨戸まで作つて此家の造作を先方へ渡すこと。

オトシ 出入口の板戸に装置してある戸閉め用具。闕の端に開けた穴にその先を落し込む設備。

コーバリ 風よけの爲各板戸にそれ／＼内側からあてる角な杉棒。

ホイトカクシ オゲカクシ、ヘンドカクシともいひ、家の表入口の左端に一尺幅程のかくしが作つてあるのをいふ。内側に杖、傘等を立てかけるのが例である。

ホコリカツキ 表入口を入るとすぐ右手に唐白塲があるが、その踏臺の右脇の所にある大柱。

ミツケバシラ ネコツナギともいふ。土間から踏段を上つて上り框の角に立つてゐる柱。

ゲバシラ 主柱以外の下等な木の柱。

マビサシ 庇。

サシカケ 急襲假庇。

スヤ 竹を編んで作つた天井。

ヤンダレ 軒。軒端はヤンダレグチ。

オダレ 軒。

イジンダテ 田舎の小學校舎のやうな寄棟造り。

ヤナミ 屋根の勾配加減。

オーヒラ 次項コヅマに對し屋根の前後の面をいふ。

コヅマ 屋根の向つて兩側リョウソウ。

エンエノシモ 表の縁の戸袋のある方の端の部分(南向きの家なら西の端の部分)。

トコノシモ 床の間の左側に一間の押入れがあるのをいふ。

ヨコザ (1)圍爐裏イロの正座名。(2)茶の間、ナイショともいひお勝手の間のこと。

テイレ 茶の間の壁際につくりつけた戸棚。食膳、食器、壺類等を收める。ウツケトダナともいふ。

カンダツ 木で格子形に作つたもので、切炬燵の火を防ぐ蓋。この上に檜を置き蒲團をかける。

ジヨタン 長火鉢。

アニコ ネコヒバチともいひ行火のこと。機ウヂの下などへ置いて足を温める。

イチブ 雑穀を貯藏する押入れ。押入れでしかも穀物カクモノ入れになつてゐる。鼠を防ぐやうに出來た固定的ロー

マイ。

ローマイビツ 二斗入り程度の穀物櫃。蓋は半分は打ちつけて、半分はめくるやうになつてゐる。

イレコ 約二升半入り赤塗の木箱で、かぶせ蓋フツクハの米入れ。ジンギ(親類つきあひ)用。

ハシリツボ 流し元の脇にあるハシリミツ(使ひ水)の溜まる壺をいふ。

スマル 小さい四五寸の四つ爪鉋で、井戸に落したものを取るに用ひる。平素は天井へぶら下げて、飯籠を住

の他を吊す。

バイジョ　ろくろ細工で一枚木を剥つて作つた直径六七寸のすくひ道具。家に備はつた唐臼で米麥等を搗いたのをすくひ出すのに使ふことが多い。又、穀類、粉類をすくつて入物に入れるのに使ふ。

シヨク　机、机一般。

チヨウダライ　木の手洗鹽。

ゲスイタ　風呂の底板。

ヨーバ　便所。上品な語である。

オトシワラ　わらをすぐつたハカマで作る。用便の後紙の代りに用ひる。

モロクチ　大判の障子紙。

ボクト　棒切れ。

フゲシ　杓。

スリピーチ(老)　スリゼンコともいひ隣寸のこと。

ツケダキ　くどの下を炊く時、始め點火用にあてる燃え易いもの。「何ぞツケダキ取つてかせ」は、何かツケダキになるものを取つて寄せ、の意。

スクズ　枯松葉。

コギ　枯木枝。コンギレともいふ。

ソベラ　小さい木端コツマ。

ガラ 割木に割るのには小さすぎる四五尺の丸のまゝの木で、割木の長さに切つて薪にする。これをもワルキとも言ふ。

ゴヘダ 石炭。

カガリ 煤煙。

モエシリ 燃えさし。先の方は燃えてゐる木の小枝。

サントク 一種の提灯である。六角形で、上下に六角板があり、それを角毎に柱で連結させ、周囲には紙を張る。

コトボシ かんてら。

ヒョーソク ロソク状のあかりの道具。六寸程の高さの白い陶器の中に、ハタシ(織絲の最後の残り)に石油を染ませた芯を入れたもの。

マツコ 松樹の株の腐りきつてポロ／＼になつたもの。これは焚物にはならないが、この腐つた所を除けてゆくと中に固くてよく燃える芯がある。これがコエマツである。

コエマツ 松でもむろのきでも腐つた株には油ぎつた固い芯がある。これがコエマツで、雨乞の松明には之を利用し、その行事に従ふ人は大人も子供もこのコエマツいぢりをして騒ぐ。

トイシミ 燈心。

アリアケ 夜中燈をつけたまゝで置くこと(ランプの頃のこと)。法事や振舞、旅から來た客の寝てゐる時とか、子持ちの部屋とかに使ふ。

エヅイタ 家屋の設計平面圖。板にひくのが例である。

コヤバライ 普請小舎が出来ると神主さんに拜んで貰ふ、そのこと。

タテマエ 家屋を新築するのに骨組を建上げること。

ウシ 家組みの最大の木。タテマエの日ウシを上げる時に、酒をそれへ供へるが、このことをウシニミヅノ

マスと言ふ。それから連中が飲むのである。

ムネマキ 棟を作り上げること。出来上つた棟通りの中央へは南天の小枝をさし、米や炒粉を供へて祀る。

ムニヤゲ ムナマツリともいひ上棟式のことである。平屋は地階に、二階家なら二階に板を敷いて座を作

り、盛大にやる時は別に他へ櫓を設けて舉行する——タテマエの夕刻満潮時に合はせて。エヅイタの上へ

罌壺、指し金、前手斧、尺杖(マイゼー)(二間尺)、鋸、鉋、金槌、鑿を置き、鹽、神酒、白米(ハチガ)を供へて祀る。餅を撒

く時はシオガタメ(次項)も共に祀る。棟梁が拜んだ後、家族・濃い親戚の順に拜む。次にお神酒を頂き、

愈々餅又は錢を撒く。餅はすべて斗桝に入れてある。當日は「今日やお日がら良うてムナマツリでござい

まひて」と挨拶をする。

シオガタメ 上棟式に棟梁がお祭した後、自ら四側のお鏡餅を東西南北の四方に撒くのを言ふ。餅は總て斗

桝に入れてあり、家族、親族の餅撒きはその後である。シホーガタメとも言つてゐる。

ノサマツリ あらまし家が出来てする落成式。一體屋根を葺きおろすとすぐ南天(ナムテン)の小枝、肴、米を供へる

昔はその日がノサマツリに定つてゐた。

オーヨセ 大寄せ。棟上げの翌日村中の手空きが出て、壁土運び、木舞作りなどに合力するのをいふ。

ザヌコ 竹を竝べた床。

ヤガタメ 家固め。一番壁の濟んだ目のこと。この夜はお粥を炊いて近所七軒へ小溝を渡らずに行つて配る

(今は殆ど行はれぬ)。近所七軒にイデをわたらずに行くこと實際は不可能。

ヨドヤ 石灰壁、化粧壁。

ヨドヤヲカケル 石灰壁に塗る。

ケシヨイ ミヅヤともいひ、白壁或は買土(白でない色土)での上塗をいふ。

ヌサ 石灰壁或は白壁の用土をこねる時に中へ混ぜる小切り藁。船の纜の腐つたのを極く小刻みにしたのが

本格的である。

マキリ 竹釘。

ホテ カツオギに相當する藁束で、棟に竝べる。

ヌズメオドリ 前項ホテ押へになる竹、つまり屋根の最上にあるもの。雀が其上へ止つて踊ると見た所より

の命名とはお愛嬌である。

ホコダケ 屋根葺で藁藁押への竹。

ヤネイタ 藁藁屋根を葺く時に表面を打ちつけて揃へる板。打當てる面は元祿模様になつてゐる。

フキオロシ 下方から上方へと棟まで葺き了つてから、前項屋根板で表面をきれいにたゞき揃へて整理しな

がら下ること。

ツチバシリ 藁屋根の葺替の折の運搬役。藁や竹を運ぶ。藁はウツシヤやハンヤのツチ(四五頁参照)にあるの

でこの名がある。

ヌヒトオサエ 葺替の折、垂木の上側に横にもつてゆく竹。

ヌヒトダケ 葺替の折、垂木の下側へ當て、垂木の上側のヌヒトオサエと結び合はす竹。

エツリ 葺替の折、垂木の間、垂木と並行におく竹。エツリのエはjoと發音する。

ジンゲ 村中。

チャクチヨー 村の總寄り(總會)での出席點呼。動詞はチャクチヨーヨブである。

ソグナイ 人づきあひ。例「あいつあソグナイの悪い奴よ」

ジンギサキ 縁類、親類。

ウスイツケ 血の關係の薄い親類。

キンジョイツケ 近所づきあひの親類。

チハシ、チノハシ 遠縁。

ツルク 縁者。

ヒキツリヒツバル 縁をたどつてみると彼處も此處も皆關係がある時に言ふ動詞。

モタレ 芝居、浪曲等の一座で座頭まがしらの次の者。

ナカジク 同じく中堅。

ヒヨーケンジ 見世物などで滑稽役。チャリヤクともいふ。

イモジャ いかけや。

トースケ 銚鐵。

カナハダ 鍛冶屋のふいごの口の邊にへばりついたもの。

カナクン 鍛へる時に剝け落ちる焼け金の粉。

イイダ 桶の輪替屋。

イバ 石垣を築く職人。昔その専門家が旅から來たのに言つた名。

コミサガシ 旅から來る唐津もの(陶器)賣り。舊の年末年始など農家の閑の頃にやつて來て夜などにソヤシ賣りをする。その冗談口には各々師匠傳への系統があるといふ。

ボテフリ ところ天、饅頭、燐寸、線香、駄菓子などの商ひ籠を一荷擔つて賣歩く者。中年以上の女がやつてゐるのをよく見た。反古を買ひながら賣つたりなどする。

イツセンクリンヤ 安物店屋。市から市へ轉々と賣歩く連中。ニセンクリンヤともいつた。

オイブツツアン 負ひ佛(箱)を背負つて來る六部。お遍路さん。

オゲ、オゲヘンド 物貰ひ、乞食。遍路姿ではあるがその實單なる浮浪の物乞ひに過ぎぬ。又惡罵の語。

ジンバ 老夫婦、翁媪。

コマオバーサン ヒューバーサンともいひ、古いお婆さん、即ち曾祖母のこと。

アトシキ 家督相続人。

アラシコ 働き盛りの男子。

キムラ、キムラノキヘー 氣分にむらのある人。

ウドヌケ (1)大ぬかり者。(2)誤つてぬかるにもいふ。失敗。へま。

ウドガイシヨナシ 全くの甲斐性なし。

ウチコケシラス 呑氣者。アンキマルとも。

ヤワイコキ 人の噂をつくりく言ふ人。彼處へ行つては此方の事を悪く言ひ、此方へ來ては彼方の事を悪く言ふ。

オベラコキ お上手言ひ、お世辭言ひ。オベンザイともいふ。

ヘツバコキ 虚言者。

ネンドクリ、 ネンダクリ 喋舌り散らして憚らぬ者。

マンダクリ、 ズンダクリ お喋舌屋。その喋舌る様子を「ズンダマンダ」といふ。

ゴクドノカワ 極道者。時に手に負へぬ子供の憎罵にもいふ。

トクトノカワ 横柄な者。

スイホーオナゴ 女親分と言つた肌の人。

ザマクモン 不始末屋(女)。又刈草などの雑多な草を刈集めたもの。ザマクナ(八三頁)参照。

ノフゾーモン 横柄者。ノフゾーナ(八三頁)参照。

チヨーサイモン お調子者。

人をチヨーサイモンにするな 俺をさらさら馬鹿にするな。

イタツタモン えらい人。又よその人のやることを大したもの、だといふ時「イタツタモンだ」といふ。

ネンシヤモン 物を過度にまで念入りにする人、女みたいな几帳面屋。

ドークレモン

何を言つても返事もせず押黙つてゐて不意に反抗的な一言を吐き出すやうなのをいふ。

あのニンゲ(人間)はドークレゲナ どうもあの男はドークレ根性だ。

クワシヤ

女のジュンナラン(一筋縄でゆかぬ)のを言ふ。

グンスリ、

グンスリサー ぐづぐづ者。

キレゴミシ

綺麗好きで始終拭いたり掃いたりしてゐる人。中年女についてよく言ふ。

ダンドリシ

何事にもよく一應の計畫、見積り、勘考を以て臨む人(少し嫌な感じ)。

ドーレンゾー

放蕩者(極く卑罵)。

オコリトンボ

とてもブンくよく怒る人。

ドラ、ドランボ、

ドラッポ 放蕩者。

ヤリガンボ

負けず劣らず言張る者。

ネグワンス

寝太郎。主に女にいふ。滑稽味あり。

カマリテ

仕事でも何でもする手は持ちながら、依怙地に理窟をこねてしないのをいふ。

ドロマツ

感のとうい奴。カントロともいふ。

ヒョーヒヤク(稀)、「おどけなどを多くいふ人。

ヨモサク

全く下らなくて而も罪のない明るい冗談をヨモグといふが、さういふ冗談言ひ。

ゲロサク、

ゲロハチ 笑ひ上戸。ゲロともいふ。

サイハチ

出しや張り、差出がましい人。

要らんサイハチやくな 要らぬおせつかひするな。

ペンタチ 辯達者。

ヤマカケ 仰山言ひ(假病など)。何でも過大に言ひふらすもの。

ノボクラ、ノボ― 仕事が嫌ひの怠け者。ノ―テーともいふ。

テボクラ 手不器用者、手器用でないこと。

テンクラ 女のあちこちふらつき歩き、仕事もしないのを言ふ。

ゲドザレ 馬鹿者め。

グドシヤレ 口やかましや、くどく言ひ。多く中年以上の男子だが時に老女のこと。

グド 口やかましい小言。小言を言ふことはグドヒル。

アムコタレ、アムコ 阿呆。

ネンゴタレ 衣裳、容色を飾る女。その動詞はネンゴートル。

シヨ―タレ 女の不精者。

ナガジロ 氣の長い人。話したら坐り込んで容易に引上げぬ。

ノツバリ 横柄な威張つた様。

ネツツリ するゝもーしよん。女の裁縫の手の遅いなど。

ヤングワラ 無茶ばかり言ふ、筋の通らぬむづかしや。大人にも子供にもいふ。

キゲンフーゲン むら氣、その時加減の氣分。

ウケコケ 何事もどうでもよい呑氣者。

テレンプラン 何をするともなくぶらり／＼してゐること。

チコチコ 落着かないで苛々する人。

キロキロ きよろ／＼。多く男の子に言ふ。トンキロとも。

アンツク 小馬鹿。相手の一寸抜けてゐたのをたしなめる時などに之がよくあてはまる。これに對しドンツ

クといふのは鈍物、馬鹿。

テレツク 前項アンツク、ドンツクのひどいもの、いよ／＼の馬鹿。

ヤセガリ やせつぼち。

チンコ 小男。子供に ついてもいふ。

ヒダリコシ 左利き。

テクナイ 不具、負傷などで手の不自由な人。

イグチ 三つ口。

ウシゴロ ！ ゴローとも言ふ。唾のこと。はきくと返事をせぬ者にもいふ。

ダマクリ だんまりや。

ヒガラ 見える眼が、外觀は見えないらしいものゝ悪口。

ハナツンボ 嗅覚の鈍感なのを言ふ。

ウケベツ 臍が上向きになつてゐるもの。

ホツカイアシ 柄に似合はぬ足の大きい者を罵つていふ語。

ヨザレヒキ 夜、長起きする癖の人。子供にもいふ。

サブヤミシ 何時も寒いくと言つてゐる人。シビヤーとも言ふ。

ガツソアタマ、ガツソ 頭髮蓬々。

シャングワ 不整髪。その酷いものはオーシャングワ。さういふ頭をすることをシャングワカヅクといふ。

チジュー 髪の縮れたのをいふ。その酷いのをダンチジューといふ。

アカシヤリ 茶褐色の頭髪。

デブ 額又は後頭の恰好悪くつき出てゐるのを言ふ。

オゴオゴ 髭が不規律にぐぢぢ〜としてゐる様子。

ウツバイ 風貌。

ニントケ 顔貌の品格。

ツツ 頭のぎり〜、つむじ。

ハンコ 幼男児の顔剃りに際を立てる時、兩耳前に長毛を存置したのをいふ。頭を丸坊主に剃つた時にも之を殘す。之があれば可愛いとしたものだが今日は殆ど殘さぬ。童詞ではキーキーといふ。

テヤワセ (1) 剃刀の切味を増す爲に掌や袖の端等で。パツ〜と軽く擦ること。(2) 餅つきの折、杵の相手の者が搗いてゐる餅を水をつけて扱ふこと。

ピンチヤク、ヨコピンチヤク 横、側面。顔につけて言ふことが多い。

ピンター 頭の側面。罵言に用ひる。

ピンゴ 頭の側面。一般に横の意にも使ふ。ピンゴシも同意である。

ハンサキ 目の前。

マー まゆ。

ドーナクボ うなじ。

ヒチミツ 臂先のこと。皮膚が少しく黒くなつてゐる。

ドンバイ 腹、時につき出た腹の意。ひどく太つて突出た腹はオードンバイである。子供の食後の腹に言ふことが多い。滑稽味あり。

ツベ 尻。オツベダチは倒立。ツベカヤリは頭から先に著けて前方へ轉廻する。ツベカヤリをすることをサカツベコクといふ。

ホタクラ、ホダクレ 太股。

モモタラ 股。

ヒカガミ 膕、脛の内側。

トリコノフシ 蹠、クルマとも言ふ。

キビシヤ 踵。

タブネ うたゝね。動詞はタブネコク。

ゴロ いびき。

スコベ 音無尻。

サムサ 寒氣に遭つて皮膚にぶつくと生ずる粟のやうなもの。

コケ 垢。

ヤーラ (1)急所。(2)柔術。

ヤマ 急性結膜炎。

ミミゴ 耳だれ。

デンバチ 子供の頭に、何處が根とも頭とも分らぬやうな腫物の澤山出たのをいふ。

ホーチャク 腫物をつゝき過ぎて却つて悪化すること。

フシコブシ 瘤狀の腫物が澤山出て凹凸をなし、見苦しくなつてゐる様。

ハクラ 土用に跣足で歩いてゐて目に負け、熱の出るのと言ふ。動詞はハクラースル。

ウラブ 瘰癧。

カラスネ 手足(主に手)の指先が一寸痺れて自由が利かなくなること。

カラスネガイル カラスネになること。

ヘーダ、ヘーダモチ 胸がせつなくてぢつとしてゐても息苦しうに言ふ人。

カクシヨノヤマイ 欲しくても食へぬ病氣。カワキノヤマイともいふ。

ヒエ 梅毒。

チャセン(稔) 西洋人。又特殊部落人。癩病人。

ホッポ 癩病。ナリップともいふ。

ヤミセワツライ あれこれと度々思ふこと。

スイバリ 人の躰に突刺さつたとげに限りかく呼ぶ。竹の纖維のことが多い。
ゲツバ 嘔吐したもの。

○

ガキドサレ 餓鬼。人を極く悪しざまに罵る時。子供についていふ事が多いが、大人をもいふ。

コビンチャ 男の子の卑俗な愛稱又は罵言。「小僧」といつた感じである。

コマガリ 分不相應に小さい男の子。

イゴ 無茶を言つたり暴れたりして手古摺らせる男兒。イゴハチ、イゴサク、イゴスケ等ともいふ。

ネジレダシゴ 前項イゴと同じ。たゞネジレといへば大人の男にもいふ。

ガンニヤル、ガンニヤクソ 弱蟲の男兒。

ビービー、ビーダレ、ビンダレ ぐづれもびい〜とよく泣く兒。

ホシソ 泣かぬ子、良い子、可愛い子。ホシソ〜といへば慈愛の言葉である。

ホシソヒトル 溫和しく遊んでゐる。

ホシソぢやなら 機嫌よく遊んでゐるねえ。

カツサイ ガンボーともシヨータイワルとも言ふ。言ふことを聞かず普通以上のわるさをする男兒。

ネンドホリ 根掘り葉掘り聞く子供。

コーバリ お轉婆。

ハチマン お轉婆。

ハチユー 動詞。女の子が大人や男兒に負けず、したゝか言ひ合ふ。

ネハオキ (1)寝て起きだち、多く幼兒について言ふ。目覺め口の不機嫌な時など。(2)朝のまの意。

クジークル、ネクジクル 幼兒のむづかること。動詞。

ヒナヤミ 火遊び(子供のやるのに言ふ)。

ヒネシリモチ 拇指と食指とで捻つて痛くしてやることの比喩。「ヒネシリモチやらうか？」と訊ねて捻る。

チッコロ、チッコロコマ 圓いまゝの木を挽切つて作つた一種の車輪。車輪にせずそのまゝでもてあそぶ

こともある。

ダイバン 面。

ウドミ 凧の後側につける紙を刻んで作つたりなりを生ぜしめるもの。

クワンモト 凧のとりつけ糸。これに疊糸を長くつないで飛ばす。

ネンガラ 五寸釘其他の金棒類で男の子達が互に土地に投げて打込み他人の打込んでゐるのを倒す遊び。

リッケン 兩拳、じゃんけん。

リッケンホイ じゃんけんぽんよ。

アイコデホイ 兩拳で相手と同じものを出した時に兩拳をし直すかけ聲。

オイモンバラ この時はフロシキを出さねばならぬ。

パラナシギユー この時は石を出さねばならぬ。

ギューナシチヨキ　はさみを出さねばならぬ。

シカシカナンジツナナンボーン　男兒が他の子の屈んだ背に馬乗りになつてする遊び。右のやうに言ひやら指何本かをそつと出しておく。それを言ひあてられたら交替。

マルトビ　地上に○○○○○○の如き輪を書き、一丸は片足、二丸は兩足で行つて歸り、無事一往復すれば

自分の持石を第二丸へ進め、これを繰返して次々と進めてゆく遊び。

ケツツリ　右のマルトビを石を蹴りながら行つてくる遊び。これらの遊びの持石をテツといふ。平たくて据

りのよい小石を用ひる。

ナスビサガリ　一人の四つん這ひの背中に、左右から別の二人が足を組合はせて倒にぶら下る遊び。男兒のみならず女兒もやる。主に壘の上での遊びで、この幾組もが這ひ競争などする。

テネキリ　男兒の山遊びの一。草刈りにやられた先で銘々の荷の出來を最後に一握りづゝ刈つて協同の一束を作る。是に各人が順々に鎌を打込んでテネ(くゝり)を切らうとする。巧く成功した者がこの束を貰ふ。

ヒワタシ　炬燵などで線香に火を點けたものを渡しながらする尻取り遊び。罰はシツペー。

ツバイゴト　騒ぎ遊び。主に冬季男兒が是といふことをするでなく駆けずりもみあひ、たゞわけもなく騒ぎまはる遊び。

オヒチ　お手玉。

イトドリ　女兒のあやとり遊び。

オーツベコツベ　二人が背中合はせになつて腕を引掛けあひ、交互に對手を背負ふやうにして次の様に大聲

戯

童

で唱和しつゝ前へ傾きあふ遊び。主に女兒の冬季ぬくもり用の遊び。ツベは尻。「オーツベコーツベ、ヒツ
カリマードーハーチノス」

ダンゴ 遊びの時まだ幼くて物の數に入らぬやうな連中はダンゴと稱し、適當にあしらひつゝも仲間内の黙
契で無視する。

アゲ 謎かけ遊びで、謎がどうしても解けない時に言ふ語。

ドーベ 順位のお尻。

ハット 通せんぼう。

ゲーラン 一寸危いことや面白いことをしてゐて、「これ見よ」といふ時「今がゲーランゲーラン」などと面白
く言ふ。

ミートコ 子供が何か良いもの(生えてゐる植物類など)を見付けてその獨占を宣すること。

ミートコスル 獨占する。

わしがミートコひたんでー 私が見付けた、ちやんと私のものなのよ。

ドーボイ(兒) 旗、幟。稀に中年以上の男は國旗などをフラフといふ。

イデノカミサンヨケトイデー、 ショーベンミースガーナーガリョールデー 小兒がイデ(八頁参照)に立小便

する時の唱へ言。

アップ(兒) 美しいもの。以下兒語である。

バツバ 無い〜。ナイナイともいふ。

カツホ 筍。

オツホ おんぶ。

コツパ (1)ねんねこでのおんぶ。コツポともいふ。「コツポで食うてー」といへば「ねんねこでのおんぶして頂戴

よ」の意。(2)煙草。

トント、 トントン 酒。

ヨイシ 船。船を浮べて行かせながら「ヨイシヨイシドブネモヨイシ」と言ふ。

チロ ねぎ。

ツイスル 吐く。動詞。

シューヨー 祝言、婚禮。「今日はシューヨーでございまひて」と挨拶する。

チャコンレー 略式婚禮。

カカヨビ 嫁取つた翌日に親類の女をよぶ。

ミチアケ 嫁に來ての親類への挨拶廻り。

ゲンサイ ナジユミとも言ひ、未婚同志の情夫婦關係。又その人々。

トマリコ トマリヤドの常衆。泊り宿は青年の世話が好きな家、又は青年のある家が提供する。納屋の二階

とか主屋の一室とか。

ヨバン 夜這ひ。夜這ひ連の若衆をヨバンドといふ。

デヨビ 産前に其處此處の親戚が安産の前祝ひとして妊婦を招待すること。

シケル 難産する、生れかけて困難する。動詞。

ヒヤワセ ナツケとも言ひ、生後七日目の命名日、及びその招宴。「こんちやあヒヤワセでございまひて、

御丁寧に御案内でございまひて、招かれて來まひた」と挨拶する。

ヒヤケ 誕生後三十三日目、内輪の心祝ひをする。

ウジマイリ 誕生後百日目にはじめて氏神様にお詣りにつれてゆく。これを「氏子札に附けて貰ふ」といふ。

○

シクワ 絲花。人が死ぬと先づその枕邊を整理してお祀りするが、其時シクワを作つて立てる。三尺程の細

長い割竹に切紙(細い紙の片側に缺を入れてピラ／＼にしたもの)を巻いて、絲筋のやうな紙の花を咲かせたもの。これは葬式の時にも別に一對作られ二人の人に持たれる。

レイクノメシ 二合半の飯を特別に炊いて、ダンゴメシ六個にしたもの。前項シクワと同時に供へる。是も葬式の時イリワン(七〇頁参照)に入れて墓へ持つてゆく(いづれ烏の餌となる)。

マクラガヤシ 死者の頭を剃り髻を洗つて北向きに寝換へさすこと。夜具の上へは刀を載せ、倒立させた屏風をたてまはす。

ミヅノコ 不幸のあつた家へ親戚から贈る米。

ブツショ 法事に持つてゆく米。

ユーカーン 納棺行事。葬式の日にも最も近親の男が主になり(死者が女性の場合は女の働くことが多くなる)、

死者を寝かせてある納戸の壘をめぐつて藁又は筵を敷き、その上に鹽を置いて死體を洗ひ、前項マクラガヤシの時に既に剃つてある頭に又一寸剃刀をあてる。死人に觸る人はユーカーンザケといふ冷酒を飲んでからする。洗ひ終ると女共で白衣を着せ、今度は男が棺に入れる。その折家族の者は頭髮を少しづつ切つて入れ、サンヤ(次項参照)なども入れる。棺の蓋は釘付けにする。この間親類の主な人々は鐘に合はせて「ツ

「ナーモーナー、ミーダンボーイ」の念佛を繰返す。

サンヤ、サンヤブクロ 四國遍路に出る時と同じ袋で、棺に入れてやるもの。中に錢六文、櫛、湯呑、絲、針を入れる。棺にはサンヤの外、枕、念佛紙其他その人の生前を記念するものを入れる。

タチハ 出棺前和尚さんにお經を上げて貰ふ所でお供へするお膳。御飯と白豆腐に醬油をかけたものとの二品。死者の食べ終ひの意。

グワンモドキ 當人の常に使つてゐた飯茶碗を出棺の時に割ること。

ケチゼン、ケチエン 葬家の表(四六頁カンドのこと)を廻つて儀式を修し引導を渡すこと。緋の衣を着た導師が二人の時はニブツ、三人ならサンブツのケチゼンといふ。普通はすぐ葬列にかゝつて墓場へ行くので、ケチゼンをするのは一段と格式張つたものである。

ハナオケ 葬列の持物の一。青竹の上部を裂いて漏斗状にしてあるのへ散花を入れたもの。今は細長く割つた竹の編みつばなしの籠に紙で櫻の花を作つてつけたもの。

ロクド 葬列の持物の一で、竹杖の先に板の小屏風様のものがとりつけてある。これには坊さんが字を書き、その前の二ヶ所に錢三文宛置いて其上に蠟燭を立てる。

テントーテンチャ 葬列の持物の一。臺に湯を入れた湯呑をのせたもの。臺の端には削つた箸を立てる。

イリワン 死者の姪又はそれに近い縁の婦人が頭に載せて葬列に加はる蓋無しの淺い長方形の箱。中にはシクワ(最初に作つて枕邊に立てたもの)、レイクノメシ(六九頁参照)、團子、塔婆、抹香を入れる。葬列の大切な持物である。

メーハチ どちらの様な物で二枚を打合はせて鳴らす葬式用樂器。他には太鼓、小さなたゞきがね(和尙が打

つ)があり、チン(叩き金)ドン(太鼓)チャラン(メーハチ)と漸次急調子になつては一しきり終る。

ダンヤバコ 佛事の時お寺から預つて歸る坊さんの用具の入つた挟み箱。太鼓、メーハチ(前項)などが入つてゐる。

トツケ 棺を舁く人二人及びイリワン(七〇頁参照)を頭に載せる人を言ふ。屈付である。

ゼンノツナ ソーレンゴシ(靈柩)の後につける晒木綿の綱。女ばかりが近親の順にこの綱を持つ。片方の手

には紙巻柄の竹杖をつく。この綱は惜しむといふ意味で後へつけるのだと言はれてゐる。

イリオケチャ 小豆と炒つたそば豆とを入れて炊いた飯。葬式の翌日、死者の着物や蒲團を洗つた女共が食べる。

シヨモンワケ 遺品分け。衣類のことが多い。時に金も分ける。

ブク 服喪中。死んだ早々はナマブク。

あしとはブクぢや あの家は服喪中だ。

ミツマツリ(老) 法事。又老人がゴツイゼンともいふが、これは最も上品な語である。

ヤマサゲ お墓詣り用の水桶。

チャトシヨコ 佛前に供へる湯呑。お茶専用である。毎朝朝食前にお茶をお供へする。

アサノマホーシ 朝食前に一寸坊さんにお經をあけて貰ひ、家の者だけ、或は近親二三も加はり、極く内輪

に簡略に済ます法事。

コソメ 慶弔とも人よせを小規模にすること。ウチワと言へばそれより更に簡略。

オクリゼン 招待したのに來なかつた家へお膳を持つて行つてやるのを言ふ。ちゃんとその世話方がゐる。

ゴシンドー 慶事のあと仕舞の御馳走。くやみ事の場合はアトジマイといふ。

キンケ 脚のついた神様のお膳。

オシキゼン ベタゼンともいひ、脚のつかない神様のお膳。

ゴハイ 神社の拜殿の上り口の眞上にしつらへた特別の庇。

オクマ 氏神様に御祈禱方を頼むのに持つてゆく米。

デキバツオ 出来初穂で氏神様に供へるのを斯く呼ぶ。初穂とは言つても米にして持つてゆく。オハツオ、

ツクリバツオも同じ。

ケンザキ お洗米の入つた紙包み。劍先ぎのやうな壘み方がしてある。

オゴク 神前へお供へした白飯のおさがり。多くは氏神様についていふ。

オゴロビツ 唐櫃(神社用に限る)。

オイボ 法螺貝。お山(石鎚山)に参る時に用ひる。

ウジコフダ 氏子札。別に札そのものは無いが氏子にして貰ふことを「氏子札につけて貰ふ」と言ふ。

シコクヨビ ヘンドヨビともいひ、親戚の者が四國廻國に出るのを招待すること。

イツモサンゲー 出雲講があり、輪番でお詣りにゆく。

イバナタツ 舊正月十一日は「初祈禱」と稱し、氏神様に古式の射禮を奉納する。その射手に出ることをい

ふ。村の高地側と北側とから六人づゝの青年が選抜され、當日交互に出ては射禮を行ふ。

ミヤジオ

舊七月十七日、宮島さんの祭の夜は年中での大潮で、この夜子供等は焚火をして泳ぐ。

ミヤガラス

舊八月十四日の夜、村の秋祭の第二夜に、社の拜殿では御神樂が執り行はれ、廣庭では秋祭行

事の獅子舞が十二同行はれるが、其時本殿裏の軒下に二三枚の筵を敷き、村の老翁らがウワイ〜と小歩みしながら悠長に叫ぶ。この奉仕人と言ふ。一般の參詣者は之にお賽錢を投ずる。

サイキヨニン

秋の村祭の獅子行事の統治役。

エベスマツリ

(1)漁師の十月の龍宮さんの祭。(2)商人は十一月二十日に商賣の繁昌を祈つてエベスマツリを

する。

トージ

新正月から十日前の日で休日。土地は耕されぬ。この日南瓜を食ふと中風がつかないと。

マエシヨークワツ

ミンマともいひ、師走巳午の日に執り行ふ新佛の前正月まつり。新佛の墓前には松を飾

り、寺では村中の新佛を並べて祀る。そのお供物は家々からあげる。その家々では親類を招び、餅を搗き、そばを打つて食べる。第二日目には親類こぞつて墓と寺とに詣る(墓と言つてもまだ墓碑の出来てゐ

ないことが多い)。

セチヅキ

舊正月前師走の二十日頃からは家々で殆ど半歳もある程の澤山な餅を搗く。その爲の糯米なり黍

なりを搗くこと。霜月の終頃から始める。夜などに。

コツトリボース

家の納戸の方から出て來さうな何かしら怪しいものを、子供は斯く呼んで恐れる。一

オボラ、オボロ

亡者の靈火。

クワシヤ 棺を載せた葬禮輿ソウレイゴには前方から一人の人が天蓋をさしかけつゝゆく。天蓋をして置かぬとクワシヤ

(魔物)が来て死人を掴み去ると。或は地獄から火車が迎へに来るからそれを防ぐためともいふ。尙女のあ
ばれものも極稀にクワシヤといふ(五六頁参照)。

フルセ 動物の年功経たもの。鰻などの大きいものによくいふ。

エヌコ 海の魔物。人を引摺り込んでゆくものとしてゐる。

ウシボツ 海坊主。浮いたり沈んだりする海の怪物。

アヤカリ、 ヤヤカシ 船や磯や瀬等になつてみせる海怪。アヤカリの船は航海燈を反対につけ、その光は

光芒が無いといふ。アヤカリが障害物になつてゐる時は、避けて通つては却つて何處かへ乗上げたりする
のだから、それに突き當つてゆけばよいといふ。又アヤカリが出た時はタデバシ(二八頁参照)を振るか、
或は節分の豆をふりまけばよいといふ。

イリワケ 仔細。

テツ 調子、工合。又ケツツリ(六五頁)参照。

あんだのテツにやあ行かんわい あんだのやうな工合には一寸行かないよ。

其のテツあー食はんぞー その様な目には俺は何としても遭はない決心だぞ。

インジク、インジユク 下拵へ、準備。老人の語である。

コラン こつ、要領。

テゴラン 手先の要領、手加減。

メツソー 目の子算。見た目で計つた分量。

ウエチ 上層部、表面部分。

ヒタチ 下層部分、原由。

泣くヒタチよー 子供同志じゃあつてゐるのなどへ大人が斯く言ふ。「そんな事してたら泣くもと

だよ」の意。

オンボ 正真正銘のそのもの。バカノオンボ、ヌヒトノオンボはそれ／＼「とことんの馬鹿」「隠れもない盗人」の意。

バカノドテンジヨ 大馬鹿もの。

オソノコッピ オソノカワとも言ひ、眞赤な大嘘の意。「——のカワ」といふのはよく強意に用ひられる。

マルコテ 丸まんま。

カラスツボ うつろ、がらんど。小器物などの中に何も無いのについて言ふ。

ツクツク かつくくの所、辛うじて間に合ふこと。例「今年やああんまれも出来が悪いけん、大方年貢にツ

クツク(やつと)ぢやわい」

ハツレコシ ぎり／＼間にあふこと、物事の殆ど最終。

オンザ 最後のもの。果實の出荷で最後に残つてゐる全部をとり入れたのなどに言ふ。

是が愈よじよのオンザよー 是がぎり／＼のおしまひだよ。

アラ 初。初手。ノッケともいふ。例「アラから俺おれあ本氣にやあなれぎつたのよう」

オキハ(老) 置き場所。「オキハが無あ」と言へば、どこへ置いたらいゝか判らぬ困惑の氣持。

ツツベ イネイネともいひ、もと／＼、勝負なし、互格、遣りも貰ひもせぬの意。

シキオクリ 順送り。

オヒタ(老) 落下。殿様支配の頃のことを話す時の敬虔な語。

ホテムキ 最も恰好なこと、好適。

ヨーマ、 ヨーマツ 爲にもならぬこと。ヨーマノカワ、ヨーマツノカワともいひ、軽く見下げた心持で使

ふ語。スナといふ禁止の語と共に用ひられることが多い。子供が小さな船を作つたりするのを「ヨーマツ

スナー」などと。

テンゴ、 テンゴノカワ 前項ヨーマと同じ。子供のやること等に對して、さして非難はしない氣持で使ふ語。「テンゴノカワースナ」など。

キノージ 氣やすめ、氣慰め。

オヨソマク 大凡、あてずつぽ。例「一つオヨソマクでやつて見よう」

ケンタイ、 ケンタイマク 大つびら。當り前。オーバケンタイともいふ。例「それ位な事あケンタイ(當り前)よ」

ハベ 名譽。

ウンジョー 世情の意だが、是を知らぬといふ時にのみ使はれる。「あの者あウンジョー知らん」といへば坊ちゃん育ちで世の中のこととは何も知らないこと。ウンジョウシラズは「世間知らずの者」。

テグラ 人を瞞着すること。箱一杯には入つてゐぬものがあるやうに見せかけたりなどして。例「テグラするんぢやけん彼の言ふことああてんならん」

ゾータン 冗談、おどけ。「言ふはゾータン輕いは飄箆」といふ輕口あり、是は「……といふのは冗談なんだけどぬ」の意。

アットー 意趣がへし。

ヂボコ 地金(人の性質についていふ)。

ドシヨクネ 根性。卑罵の語である。

キッツ

人の氣前、氣立て、氣質。上品なよい感じの語である。例「あの人間のキッツあーえーもんどぢや」

コーザイ

狡才、才智、でしやばり。

コーザイ言々 生意氣な事をぬかす。

アシカ

羣鹿はよく晝寢をするといふ考へから、よく寝る人の蔑稱。

カラス

演劇見世物の類を、村からかなり離れた所で催されるにも拘らず、人が三人も行けばもう出掛けた

くなる人。

オンバコ

生娘。四頁をも参照。

エンコノテ

盗人。エヌコ(七五頁)参照。

ケイゴ

特殊部落人。昔はこれがいが棒を持つて人混みなどの時警固の役をしてゐた。

ホーラク

見世物を木戸錢なしにたゞで見物出来ること。見せる側から見ると見られる側からいふ。

モモジリ

ちつと落着いてゐられぬ性分の人、長座しようにも出来ぬ人。

ヤマカタ

素人。悪意ではない。

センスラリ

センミツツともいひ大嘘つきのこと。

ダマリツンボ

聞えても返事をしないでゐる者。

ハナシクイ

(1)話を聞いてすぐそのものが欲しくなる性のもの(主に子供)。例へば壽司の話をしてゐると本

當にすしが食べたくなるやうな子のこと。(2)人の言つた事を一から十まで信じてしまふ人。實否を正さず

判断なしに其話をまる呑みにする人。

マナベクイ 人にかくれて別鍋にとつそり御馳走を作つて食ふ女。マナベは別鍋の意。

ハコオイ せむし。

トテノ一 女の子、又嫁のことも。嫁入りしても里へ歸つて來ては物を持つて去ぬる所からいふ。

● トテノ一が生れたんよ 女の子が生れたんだよ。

今度もやつぱりトテノ一ぢや 又女の子が生れた。

アガナ あんな。

ニーナ 新しい。

ボッコナ 大きい、太い、澤山な。ボッコイともいふ。

ヤジョーナ 繊弱な(器物にも身体にも)。

ノサナ 鋏道具の柄の角度が大き過ぎること。

カギナ 鋏道具の柄の角度の小さ過ぎること。

ボクシヨナ 道具の握り柄などの手頃でなく大き過ぎるもの。また、男の無愛想なのや、ぶつきらぼうよの

ともいふ。

コージュクナ、 コージュクナ 結び方が念入りで固く、容易に解けさうもない。』

アマナ 容易な、たやすい。

ハズミナ 期待がもてたのしい。

イトクナ 幸運な(羨む意がある)。

あの人あイトクナこつちや あの人には幸運なことだ。』

シンキナ 小面倒な、神経を焦々させる。

ゴータイナ 腹立たしい。

やれゴータイヤのう あゝ腹立たしい。

ムテンナ 困つた、とんだ、手のつけやうもない(人にも物にもいさ)。

アンビヨナ あぶなつかしい、心配な。

テンポナ 危険な。子供が木登りして小枝の先の方まで行つてゐるやうな時。テンポクサーに同じ。

マエナ (1)若い(作物にいさ)。(2)少し足りない(人間にいさ)。

ギントナ 禮儀正しい、義理堅い。

ジバナ 實直な。

オードナ 大膽な。

ザマクナ 仕事などざつとしてゐる。又鷹揚な。

ネンゴナ 小生意氣な。多少は愛すべき點もある生意氣。ネンゴクサーにやゝ同じ。九一頁も参照。

ズヘーナ 横柄な。不遜な物言ひをする。

ノフゾーナ 横柄な。

アガツバイナ 氣儘に暴れる。亂暴な(大人にも子供にも)。

トンポナ トンポナとこい行て……は、縁もゆかりも無い所へ行つて……の意。トンポニ(二二八頁参照)。

ドヒヨーシナ 拍子外れな。ドカヒヨカゲナ(八五頁参照)に同じ。

セシヨーナ 人間なら悪人。道具、作物などならよく／＼不出來なもの。

イナゲナ 前項セシヨーナと大體同じ。

マンロクナ 碌な。否定形と共に用ひられる。

あれにやらすといつちやつてマンロクなことあ(事は)しやあせん。

アジナ 子供が人に存外な良い物を貰つた時などアジナコトヨといふ。「よかつたね」であらうか。主に子供に向つていふ。

オシクワナ 家、屋敷、道路など廣々としてゐること。ゆつたりと廣い、十分ゆとりのある。

オコンナ(老女) キーナと同じ。黄色な。

ガマンナ 辛抱強い。

クワンタイナ 柄にもなく偉さうにするさま。

コアンキナ 小ぢんまりと富裕な。

ゴムタイナ 御無理な。

儂わづあゴムタイナ事を頼んで來たんぢやが—— 私は御無理なことを頼みにやつて來ただけど——
コロク(三二頁参照)を頼む時などに。

シンビヨナ こまめな。

ジンピナ 奇妙な、不思議な。フシギジンピナ、キミョージンピナなどともいふ。

ゾーフトナ 人が何でもよく食ふのを言ふ。

フシヨクナ 病身などで食の進まぬこと。やせた青白い人などを形容する。

テイヂヨナ 女房が夫に對して親切で、よく言ふことを守るのを言ふ。

ユーチヨーナ 裕福な、上品な(主に中年以上の男を形容する)。

ヨーシヤナ 遠慮な、氣づまりな、氣兼ねな。

濃ああしこい行くなあどらもヨーシヤナ 私はあの家へ行くのはどうも氣兼ねな氣がする。

ヨロツナ あれやこれやと様々の(多くはろくでもないこと)。

ハフシガタツシヤナ 口答へをよくする奴をいふ。

アタマガツサイナ 頭ごなしに他人を見下したやうな言をなすのをいふ。

トマスコスツタヨウナ 言葉つきが押へ切るやうなきちくした調子(持前の言ひぶりがかういふやうなのに

いふ)。

イビシゲナ 何だか怖い感じがする。イビシイ(八八頁)参照。

ウズナゲナ、オゾナゲナ 不精髪が恐ろしげにぼうくとしてゐる有様(女にも男の長髪にも)。

エツクワリゲナ 肥滿者の内股歩き。歩く拍子に肩がゆれる。

ゲンバリゲナ あまりにあからさまな、隠蔽がなさすぎる(窓の大き過ぎる時など)。

コシクレゲナ 作物(主に果實)の不出來な、コツくの、けちのついた。

ドカヒヨカゲナ 拍子外れな。ドヒョーシナ(八三頁)に同じ。

ネセクリゲナ 人を陥れるやうな、奥歯にもののかまつたやうな言ひ方。

カリカリゲナ 瘦せて枯木のやうな、骨と皮のやうな。また、ヤセゲシナともいふ。この反對はコエゲシナ

である。

シヨリシヨリゲナ

瘦せて背の高い身體つき。シヨロシヨロダカー(九一頁)参照。

シユーシユーゲナ

何だか寒々しい頬つきをして貧相げな。

ツワツワゲナ

顔をはじめ皮膚全體の色が悪く、肉附もブク／＼して全體病的なのをいふ。

ケナー

一般に物のなくなり易いこと、菓子など。又あつけなく死んだやうな時。

まあケナー事よにい　まあ飽氣なく死んでしまつたことよねえ。

オイケナー

惜しい(物質的)。勿體ない。

ヨダケナー

仰山な、大が／＼りな、やたらに澤山な。

コンゲツナー

夫あしらひの邪慳さ、女の愛嬌の無さ、慈愛のない言動等の形容。

メンドクナー

見苦しい、器量が悪い。

あの嫁あよよ(全く)メンドクナーもんぢや。

セバツカナ

狭い。セセリセバー、セセクリセバー(九一頁)と順に意味が強まる。

クイタロシナー

食つたらしくもない、何だか物足らぬ。クイタロシイ(九〇頁)参照。

ヤツチモナー

下らな。

ケケラモナー

少しもない。ケケラノケモナーと言へば更に意味が強い。

アジモスンバチモナー

全然味といふ味が無い。

ヤルセガナー

腹が減つて力がぬけたやうな。

ゲンガナー 病氣で醫者にかゝつても藥を飲んでも一向よくなる徵候の無いこと。

ノーゲノナー 主に子供の根氣の無いのにいふ。

なひた(どうした)まあノーゲノナー子よー喃。

○

ミツイ(老) 嚴密な。極稀にしか聞かぬ語。

キプイ 柵目の足りぬこと。その動詞はキビルである。

イミジイ(老) 立派な。極稀にしか聞かぬ語。

キシクイ きつい、戸の開閉のしにくいのなど。

ジュルイ 帶、紐、繩等の締め方の緩いこと、又土地の軟々しいこと。

ヘワスイ 細い鞭などの振るにつれてうねるやうに彎曲すること。

ケナルイ 羨ましい。ケナルラシイ、ケナルタラシイ(九〇頁参照)。

オタテ 心配な、悲しい(主に身内の死に際して)。

なんぼかオタテからうぞいなうや あの人ほど程か悲しい事でせうよねえ。

ヤバイイ 何につけても險呑な人に言ふ。

シワー 執拗な(中年以上の人が言ふ)。

シューター(女) 執拗な。

シブトイ 執拗な、であるがこれは一般に用ひられる語。竿秤の二、三百匁ばかりの差は怪しくてはつきりしないのにもいふ。

ダスイ 緊張してゐない、物足りない(穴に物をつめてぐづぐづの時など)。性格について言ふ時はヘコダスイ、ダスラコイ(八九頁参照等)といふ。

マター 牛馬の温順を形容する語。

ナルイ 平坦な。

アマー (1)鹽氣の足りない。(2)はめ込んだものがぐづぐづな。(3)畝歩が言ふ程より事實は多い。
カラー (1)鹽味が利き過ぎてゐる。(2)大聲で甲高い。(3)畝歩が言ふ程よりも少い。

○

コマシイ 損得に抜目のないこと。

イソシイ 骨身惜しまずいそぐと働くこと。

イタシイ むづかしい。又着物の着苦しいのにもいふ。イタシクロシイともいふ。

イビシイ 小蟲など何だか怖い、而も指先で一寸確かめてみたいやうな、小怪物に對する恐ろしい氣持。イ

ビシゲナ(八五頁)参照。

アイビシイ(兒) 毛蟲のやうな小さな恐ろしいものにいふ。

ウツトシイ 雨模様。

セツカマシイ 小うるさくてあつかましい。子のうるさくねだるのを「セツカマシイ事を言ふな」とたしなめる。女の髪の下れ下つてうるさいのなどにもいふ。

ソーガマシイ うるさい、やかましい。この極度のものがヒツチャカマシイである。
アラカマシイ 荒々しい(男の動作)。

マツダイガマシイ 常に後々のことまでも顧慮する心がけ。

昔やどうてて(そりやとても)マツダイガマシかつたけん喃。

シジマシイ 發熱前の悪寒。

○

ネチコイ ねち／＼してゐる。

ヤネコイ むづかしい人。どう持つて行つても機嫌が良くないやうな人にいふ。

ダスラコイ 性格のぐづ／＼した、緊張を缺く、物足りないのをいふ。ダスイ(八八頁)参照。

シタラクイ しめつばい。

ダイグロシイ、ダイグヤシイ 過勞で體が何處も此處もだるい(主に男子)。

メメグロシイ 目先でチラ／＼するので氣がいら／＼する。

イタシクロシイ むづかしい。イタシイ(八八頁)参照。

デラシイ 穀類や粉等を榊で量る時、思つたよりも餘計に榊目のあること。

こりや案外デラシイ喃　これは思つたより分量が多いなあ。

クイタロシイ　腹もたれが良い、誠に食つたらしい。この反對がクイタロシナー(八六頁)。

ヤゲロシイ　家の内を亂雑に取散らしてゐる。雨天で汚ならしくて嫌なのにもいふ。

リクツラシイ　見るからに偉さうな、伶俐な顔付(子供についていふ)。

ケナルラシイ　羨ましい感じがする。ケナルタラシイと言へば更にその意味が強い。ケナルイ(八七頁)参照。

キピラシイ　よくはかどる。

コキピラシイ　目覺しい。

セタロシイ　氣忙しい。

タマゲロシイ　魂消つたらしい、ひどくびつくりする。

ヤレタマゲロシヤ　あゝびつくりした。

ホーラシイ　大様な、粗暴な、あぶない(子供を冗談に放り上げたりするなど)。ホータラシイとも、ホータ

ラカシイともいふ。

スバロシイ　貧相な顔付。又無一物で不自由なこと。スバレルとは人や果實の萎縮すること。

キノボリクサ―　木綿の焦げる臭ひ。きなくさい。

シワリクサ―　人の不潔な臭ひ。寢小便をした蒲團を干しただけで使つてゐる臭氣。襦袢の汚れたのをその

まゝ干しては使ひ／＼してゐる臭氣。漬菜をあげてから長く放置したものの臭氣等。

オリタエクサ―　とかくうろたへやすい。子供がつまづいたりした時親が「オリタエクサーけんよ」とたしな

める。

コーネツクサー ねつちりく(理窟を並べるのに言ふ)。

コネンゴクサー、ヒチネンゴクサー ちよつとした輕蔑の意あり。ネンゴクサーは小生意氣なの意。ネン

ゴナ(八三頁)参照。

アジャレクサー 言葉つきや遣り方のぞんざい、大雑把なの言ふ(結果は勿論不出來)。アジャアジャクサー

ともいふ。

ジュルクサー 何だか締め方が緩くてきりつとしてゐない。ジュルイ(八七頁)参照。

ヤンジャクサー 濡れて嫌な。ヤゲロシイ(九〇頁)参照。

テンボクサー 危険な。テンボナ(八三頁)参照。

スダカ 頭が高い、偉ぶる。

シヨロシヨロダカ 瘦せて背丈の高いこと。シヨリシヨリゲナ(八六頁)と同じ。

ゴーセガタカ やたらに大聲な(たしなめたり非難したりする時に言ふ)。

オクネンブカ 執念ぶかい(猫や、動物のフルセ(七五頁)などについてよく言ふ)。

ヒキタリナカ やけに長い(物や話)。

セセクリイタシイ 何となく鏡屈な感じで不快なこと。シシクリイタシイともいふ。

セセクリセバ、セセリセバ 狭い。セバツカナ(八六頁)参照。

ドーシランニクイ くそ面憎い。

ヒワカー 潑刺と若い。

ヒワカーモン 若い衆。

ハナヤスイ(老女) 安々と(安産のときにいふ)。産見舞には「ハナヤスイニ(或はハナヤスイ)お喜びでございます。まひてお目出度うございます」と挨拶をする。ハナヤスイか、ハナヤスイニかの二通りの言ひ方があるだけである。

ハシリガイ ちり／＼と薄皮が痛むやうで而も痒い。ハシル(九七頁参照)。

ジニンダラクイ 帯の締め方が緩い、しまりが無い。

オボヌルイ 湯のさめかゝつたぬるさ。

オボヌクイ 水が熱せられてゆく途中のぬるさ。

ザザピロイ 座敷など大きくてやたらに廣々としてゐること。ダダピロイともいふ。

テンドヤスイ たやすい(物を請合ふ時など)。

テンドヤスイ事よ お安いこつたよ。

ヘコダスイ 性格の緊張を缺くもの。ダスイ(八八頁)参照。

ホーロオカシイ ちゃんちゃら可笑しい。

ホーログワイガワルイ 微恙の卑稱。滑稽味がある。

コウンマー 一寸うまい(滑稽味あり、主に男子が言ふ)。

コサベシイ 何だか淋しい心地がする。一人居の時など。

ホヌクイ 日和がぼつかりとぬくいこと。

シシラサブイ(老) 小寒い。一寸寒いこと。

ホータリアツイ(男) やりきれぬ程暑い。ホータラアツイともいふ。

ホーリガエー 家の用材の用途に應じてのゆがみ方が適當なのを言ふ。例へば、門の構への横木に多少彎曲したものを求める時、適當なものが見つかること「こりゃあまことホーリガエー」といふ。

ダチガエー 仕事のきりが良い。

クイシヨガエー 良い物ばかり食つてゐること。又よく何でも食へること。

モノクイガエー 前項は人間についてであるが、これは牛馬について言ふ。

ニシヨクガエー 馬が何でもよく食ふこと、長い物や肥桶でも。

クワニエー 牛馬の鋤仕事に眞面目で上手なのを言ふ。

ツガエー 位置が良い。主に村の店屋についていふ。此反對はツガワルイである。

ナラガエー 赤ん坊の性の良いこと。シヨウガエーともいふ。

シヨータイガワルイ 言ふことをきかぬ子供についていふ。

ドージガエー 度胸が据つてゐる(夜道を平氣で歩くのに關して言ふことが多い)。

コラエジヨガエー 辛抱強い(賞めた言葉)。

グツガワルイ 都合が悪い、工合が悪い、こつつりと安定せぬ(主に人事に言ふ)。

シビガワルイ 何だかきまりが悪い、今更顔が無い。

エンタリワルイ 肩先が疲れて何とも言へぬ程心地悪い。
ヨガワルイ 家運衰微。

ヌル

蛇の蛇行に言ふ。

ナゲ

餅がよくつけること。

もう(餅を搗くのを)止しにしようかい、良うナーだぞー。

ノブ

家運が隆盛に赴く。

ホコル

埃がすること。

コジク

人に物を呉れ〜と言ふ。

ほど(そんなに)物をコジクな。

エズク

吐きさうにすること。

シズク

幼児が親以外の人になつく。「父親の方へ良うシズクしなどと言ふこともあるが。

ヒヤゲ

干上る。かわく。

ヨダツ

とかく手間がかゝつて手を煩はす、仰々しくなる。

ハズム

楽しみにする。勢ひ込む。

ウドム

病氣で呻る。身體が難儀でウン〜いふ。

ツドウ

物事が重複してかちあふこと。

そりや悪いのう、あひたー丁度ツドーて行かれんわい 折角なのにお氣の毒だね、丁度折悪しく明
日は某々へ行くことにしたので、それにかち合つて行つてあげられないよ。

トドウ トドコルとも言ひ沈澱すること。澁飴などトドウのを待つて拵へる。

アリガウ 強ひて言張つて互に譲らぬ、敢て喧嘩の相手になる。

モガウ 前項アリガウよりも意地悪く、わざと相手になる。

イカル 満潮直前に潮水が一進一退する(内海ではこのやうな現象が見られる)のをいふ。

もう満潮ぢやらう、潮がイカトルけん。

ホガル 喉がホガルといへば、里芋の莖を食べた時の、喉が痒いやうな感じを言ふ。

ニガル 腹が抉りまはすやうに痛む。

コワル 腹がうね〜と痛む。強度の胃痛か。名詞はハラコワリ。

マワル 家運隆盛になること。

サバル 人が他の人や物にぶら下る。

さうサバルなてや そんなにぶら下るなつたら(祖父が孫に言ふなど)。

サバツテ見い、折れるわい 木の枝など採る時。

へタル (1)物の嵩の減ること。(2)尻餅をついたやうに坐ること。

へコル 同右。

其處いへコリヤーがれ 其處へ坐れつたら。

オゴル 暴れる、子供にも馬にもいふ。

イギル 同右。

オガル、イガル 大声で叫ぶ。——身の辛い時、又は危急の時。

イボル 馬の發情。

ハシル すり傷をしたり、傷に塗薬をした時などに皮膚が刺戟的に痛むこと。

ハシリガイー 右の痛みの上に痒さを覚える心地(九二頁参照)。

コビル 古くなつて時代がつく。器物、柱等の古めかしくなつたのによくいふ。

ヒネル 古くなつて新鮮味がなくなる。ヒネコケルともいふ。ヒネといへば藪類、薩摩芋等の古いもの。

クミル、ウミル 稲や畑の作物の葉が出来すぎて風通しが悪くなり、青かるべき葉が黄色になるを言ふ。

ボエルともいふ。

ホメク (1)同右。(2)ほてること。「顔がホメーテ……」等。

スエル 子供など仕事に飽くこと。

ズエル 崖などの崩れること。クズラケルともいふ。畑の崩れるのはナガレルと言ふ。

ゴテル ゴテツクともいひ、家族が親和せずごて／＼すること。

ウテル 恥しさにのぼせ上る、ぼうつと上氣する。バウテル、バウテガスルとも、又バマケクーともいふ。

コセル 太らないで年をとること。木ならコビル(九七頁参照)といふ。

こんな一年に似合はんコセトル あの人には年に似合はずあけてゐる。

ホセル お灸をしたあとが腫物の様になること。

メデル 蟲の卵或は鶏の卵が孵化すること。

ヘレル 矢玉の外れること。又人が他の人を避けんとする時にもいふ。

ヨレル 稻、粟、黍等の葉が日に負けて縮れること。そんなのを見ると「水欲しいんぢやろーぞい、ヨレト

ルわい」といふ。

セクル 吐瀉する。

テテクル 男女が相思となつてじゃれあふこと。

オネクル 人の言ふことを根本的に覆へす。

オネクリ さういふ人。

コセクル、コゼクル 人の言ふことを意地悪く掘りさがして非難する。

ダマクル 黙つてしまふ。

ネセクル 人を陥れるやうな言をなす。奥歯に物の挟まつたやうな言ひ方をして人の氣を悪くさせる。さう

いふ人をネセクリといふ。

シビクル、シブクル 大儀がる、澁々する。

ハツコル、ハタカル 擴がる(擴がるべきでないものが)。

ホザケル 立木を根元から挽伐の時、まだ挽き了らぬうちに木が倒れて裂ける。

マジワル 差支へる、干渉する(私的にも公的にも)。かちあふ。

ハナワル(老) 始まる。ハナエルはその他動詞。例「もうハナワツトルか喃」。

カタエル 乳に芯が出来て固くなるやうなのを言ふ。腫物などの出来る時固くなるのにもいふ。

ホタエル、ホータエル あわてる。

ワカエル 作物が肥料や天候の加減で若返ること。

ツバエル ふざける(青年男女にも)。

チヨロコバエル、チヨコバエル 人のちよこ／＼すること。うろたへがましいのに言ふ。

○

セギル 二本の鞭(竹を割つて作った三尺餘のもの)で太鼓を叩くのに、一生懸命で早めるのを言ふ。

サレル 水負けして色があせること(茶づけなど)。

ヨメル 着物など古びていたみ朽ちてしまふこと。

オゲル 生爪がとれる。其の能動體はオガス(一〇六頁)。

コゲル 缺ける(茶碗など)。他動詞はコグ(一〇三頁)。

ワズケル 括つた束が弛んで亂れること。又積重ねたものが崩れること。

スポモル 内へ收縮する。「内辨慶の外スポモリ」といふことを男兒について言ふ。

アツカム 面倒がる。

ツブカム 俯向いて蹲る。

ホイドク 泣く。聲を放つて泣くのに言ふことが多い。卑しめて言ふ語。

トエズル 泣くを極卑しめていふ語。

トコバル、トックワル 寝る。

トクシヤル 寝るの卑語。

ヒヨーゲル おどける。滑稽家をヒヨーゲ、ヒヨーゲタレ等といふ。

ヘンゲル 病勢悪化。

ミシヤゲル 軟いものがぐちゃぐちゃにくだけること。

シューケル 畑がじめつく。

ハマヨウ 心迷つてあわてる、あわて迷ふ。

スパレル 果實が細ること。採つて日が経つとスパレル。又木にある時でも日に弱つてスパレル。人でも瘦

せて小さくなつたのといふ。

モクレル (1) 双物の刃が缺けずに曲る。(2) 仕事のがびくになつて、しなければならぬことが一時に澤山出

來ること。モクレカカルはその強意。

ホクレル 編んだもの、巻いたものの解けること。

ガブレル 船が横波にもまれて左右にゆれ、今にも海水をすくひ込まうとすること。

ハシレル 夏物(大豆、小豆等)の莢がはじけること。

コクレル しようと思つてゐるうちに時機を失する。

モブレル よくくつつく。子供が親になど。

アバレル 子供の甘えてやんちゃを言つたりしたりすること。アバズレルともいふ。

ナゲレル 何をしてても失敗に終り、とう／＼手も足も出なくなる。

ボロケル 同右。

ネジレル 人の好意であることを曲解する。多く子供にいふ。ゴネルも同じ。

ドクレル 黙つて怒る。女のふくれること。

ボジレル 少し體工合の悪いこと。床に就く程でもない病氣。

クドレル 過熟する、麥、除蟲菊などにいふ。例「麥がクドレテ刈らりやあせん」

スクレル 眞底から冷える。「カラダ身體がスクレル」など。

スクレイモ 煮た芋の冷めたのをいふ。

シボタレル 雨にびつしより濡れる。

コシケレル 順調に成長してゐたものが、俄に惡變すること。人にも作物にもいふ。又娘が嫁に行き遅れる

ことにもいふ。

ドージレル 長上の言を聽かず、ほしいまゝに惡意地を張る。多く子供にいふ。

イロワレル 狸、狐などの怪物になでられる、化かされる。

ホタレコム 常人同志がいゝ仲になつて、女が男の方へ入りこんで了ふ。無論男が引入れたのだが女も相當

厚かましい。親は年寄りでまあ若い者のなすがまゝに黙つてゐる。

スボヌケル 東がゆるんでくくり細が先の方へ抜けること。又人が町中で連れにはぐれることを「スボヌケ
て一人んなつてしまつた」といふ。

ビヨリドク よろめく。——重い氣持で。又あわてゝ、のぼせて。

ズラレシスル 物事を延ばせるだけのばす。それで我慢が出来るだけ我慢する。

ブチコケル ひどく倒れる。荒々しいひ方。

ホタクリコケル 大きい圖體の人が不意にどしんと倒れること。滑稽視していふ。

ヤリツケル 身體の無理をして病氣になる。

ヤリキル 夜分航行中に小船が判らないで大船にぶち當り大破する。

ヤリソケル 仕損じる。

デキソル 出来損なふ。人にも作物にも言ふ。

フケブル、フケピラカス 自分で自分の事物を自慢する。

ネンゴブル 自慢ぶる、偉ぶる。

モス(老) 持参する、運ぶ。

こつちい取つてモセー 此方へ持つて来い。

ワケ 間引く。

コゲ 缺く。崖の土をとることを「ドロコグ」といふ。自動詞はコゲル(九九頁参照)。

ウケル 年いくらで借請ける。

シオトリウケル 悪水路には通常魚類を放し飼ひしてゐるがそれを年いくらの料金で借請ける。

シオトリ(八頁)参照。

スケル 財政援助してやる。

タモウ 使ふべきものでも使はずにとつておく(着物、食物、金品等)。例「美味しい食物などタモートク」

シヨノム 羨み欲しがらる、ねたむ。

マブル 神様がお守りになる。

オマブリ 神様のお守り札。

キマブリ 木から果物をもぎとる時、一つだけ神様に供へる意味で残したもの(二三頁参照)。

どうぞマブテつかーされ 何卒御守護下さいまし。

モブル 混ぜる、混ぜめしを作る。又まぶすこと(團子に黄粉を、餅に小豆を)。モブリといへばませめしのこと。

カブル 果實などに丸のまままで食付く。カブリツクともいふ。

ソエル 主食にそへて副食物を食ふこと。

味噌ソエテ食べる 味噌をおかずにして食べる。

ソエクサン 食べさしの副食物。

ウベル 湯に水をさしてぬるめる。

ソクウ 木の枝や松葉、割木等を束ねる。

ソクイナオ 束ねる繩。

ソゲル 薬仕事のためには先づ稻藁を槌で叩いて柔らげるが、その前に根元の方の葉を取除く。その仕事をいふ。

タメル 鐵砲などでねらひをつける。「烏々あとを見い、鐵砲持つてターミョーラー(ねらつてらあ)」といふ童謡がある。

コカス ころがす、ころがして運搬する(俄など)。

スルグ 麥の穂を叩いて實にすること。

サベル 箕を用ひて穀類の夾雜物をふるひ落すこと。馬が荷を揺り落すのにもサベオトスといふ。

コナス ナツモン(大豆、小豆)の莢を叩いて實にすること。

コナンベヤ 刈上げたものを家へ取込む迄に、假に入れておく小屋。

コデル 三爪鍬で探しながら、出た土塊を碎いて土地をならすこと。

オガク 少しづつでなく一度にとりのける。濱邊で草魚やまて貝を掘る時など、土砂を鍬で大掻きに掻き除けるのにいふ。

を、まあ若い奴等は一度に取つて了つた。 あいだきあつたカステラを、若あ奴等あオガキドリに取つてしまつた あれ程澤山あつたカステラ

ハツル 丸木を用材に削り上げること。チャツルともいふ。

ハツリ 大斧。

サバツリ 片手で使ふ小さい斧、手斧。

サデル 落葉を熊手で掻き集めること。

サデコム 荒つぼく物を放り込む。

サデヒテル 川へでも持つて行つて投げ捨てること。

テネル 小束に括る。

テネ 小束。

メグ 青年が憎むものに對し徒黨を組んで殴ること。

生意氣な事をよつたら(言ひよつたら)メーヂャレー。

ソースク 大きな浅い井戸や金魚池などの水を子供が混ぜ濁すこと。

タデル 船底をあぶる。その場所をタデバといふ。

コネル 傳馬船の糶の操法。

ネチル 言葉鋭く難詰する、いちめる。

ヘズル 物の量をはねて減らす。

キビル 出来るだけ少量ですまさうとする。

お祝ひに五圓やつてもよいんだが二圓キビツテ三圓にしておかう。

ホゼル、ホゼクル 小細工的に掘り出す——齒に挟まったもの、皮膚に刺さつたもの等を。又薩摩芋などを手で掘るのにもいふ。

コゼル 人を敢へて陥れて自分ばかり良い子にならうとする。又多くの品が混み合つてゐて一物が他物を壓迫してゐるのもコゼトル、コゼツトルといふ。

ハチル 子供などを平手で叩くこと。

ハチリマフス 亂暴にハチルこと。

ノクル 仕事をあとへまはす。

キヨクル 人のいふことを打消さんばかりに輕んずる。

アイシロウ お客あしらひする、接待する。

ウケル 干上る港の船を、港外の干上らぬ所へ浮べる。旅出の前にやる。

オカス 「生爪オカス」といへば生爪をはがすことであり、「岩オカス」といへば岩を割り起すことである。自

動詞はオゲル(九九頁参照)。

ヨマス 麥ヨマスといへば、米と交せて炊く前に麥だけを一度炊いておくの言ふ。

イコス 熾にす。此の自然態がイコル。

ナガス 船を所有してゐる。

彼處あそこにや黒船三ばいナガシヨル あの家では大きな黒船を三隻も持つてやつてゐる。

ウタヌ 秋冬、風の吹く頃うたせ網をする。また頃合を見計らつて青年が夜這ひに出かけること。

テベス 頭の天邊を叩きつける。「頭あたまをテベスゾー」と怒罵する。

テベシヤゲル テベスの亂暴な言ひ方。

ナメス 酷いめにあはす。ナメシヤゲルも同様の意。

ニヤス、ニヤシヤゲル 殴る(腹立つて言ふ言葉)。

ニエコム ニヤされた處が少し引込む事。

マワス 子供を胡麻化すこと。

イワウ 殴る(怒つた時でなく、輕口に面白く言ふ時の語)。

ハヤス 御幣、お札等の神物を焼去し奉つて不敬を避けること。

グヤス まとまりかけた相談を横合から邪魔を入れて壊す。

コツル とつんと握拳で打つ(大人が少年の頭を)。

ボヤス 赤面さす、照れさす。

タヤス 斷念する。タヤクラカスともいふ。

ズク 口を極めて叱る。ズキトバスとも。

オラエル 重い荷車で坂道を下る時など、いろ／＼加減して急降下を防ぐのを言ふ。

ヤゲラス 物を取散らす。きたならしくする。

サエル 飛んで来るものを受止めて叩く、ボールをバットなどで。

ハナエル(老) 始める。ハナワルはその自動詞。

サクマエル 物を整頓すること。

フンバエル しつかりと踏みつける。

ワゲネル 長いものを曲げる。

アジメル 味はふ。

コズメル 物、地所などを寄せ集めること。

一人でコズメルもんぢやない 一人でさう／＼欲張るもんぢやないよ。

ネジメル 難詰していぢめる。ネチルより酷い。

アナゲル 探索する。

アナグリヤルク 探し廻る。

モクル ズブロ(二三頁参照)を山の上から投下しながらまとめる。

セタゲル 子供が餘り澤山も無いものを欲しがつてせびること。

ツヅカウ 倒れかかった家に支へをする。

貴様がたの納屋はツヅコーとかんとこけて了ふぞ。

クゲラカス、 クガス 黒く焦がす。

セブラカス、 セビラカス 赤ん坊に喜びさうな事を言つたりして機嫌をとる。

チョーラガス おだてる。

ヒテクラカス 放つておく。

ぐづ／＼しうつたらヒテクラカヒとくぞ(親が子に)。

ヘドマカス、 ヘドマス 叱りとばす。怒鳴りつけて相手に物を言はさぬこと。

コブル 土を踏むこと、壁土を作る時など。畑コブルといへば作のある畑の中を道代りに歩くこと。

イサブル ゆすぶる。

モモシル 衣服に附いた泥を落す時、洗濯の時など、両手で持つて摺り揉み合はす事。

モキリキル 大根、干瓢などおさへつけて切る。モクリキレルがその自動詞で、自然によれたやうになつて

切れること。

ハギル 掘り起した木株の大きいのを薪用に周囲から削り取る(大きいまゝでは持歸られぬ故)。

ソビク 樹の枝を打落す。

チマジル 指先でもてあそぶ。

きれもんチマジル 双物を玩具にする。

コジョウ 荷物を入れ物に入れ、その入れ物の緒を手につか、或は棒の先に引掛けてその棒を擔ぎ、斯うして荷物を背負ふこと。

スリコム 拳骨を食はす。

オネコム 穴に大きいものを無理に入れる、押込む。口に入れる事に用ひる時は、滑稽めいた言ひ方の時。

上品でない。

ズンダクル あれこれと取りつけ引つけ色々と人に話しかける。

エドル 扮色する、化粧する。

ミタツ、ミタテル 葬列にお供すること。近親の者は晒布の手拭を肩に掛け、女は更に握りを紙で巻いた

竹杖をつく。土葬が終るとミタタ人々の主な者は村外れ迄出て、一人が件の手拭を水に浸したもので手先を清める。

コチャゲル 人のものを全部まきあげる(滑稽な言ひ方)。

ツコークル 向ふへ押しやる。ツココクルとも、ツココークルともいふ。

オイコクル 追拂ふ。犬猫に言ふが、人にも言ふことがある。

フミシヤゲ 踏みつぶす。

クイクサス 食べきれないで残す。食べかけて一寸中止する。

デチガウ 毆つたり蹴つたりして徹底的に酷い目にあはすこと。

ハイカケル 水などをぶつかけること。

ココシル

(1)愛撫する、歡待する。例「去んで嬢にココシッテ貰へ」(2)下心あつて人によくすること。

ダマクウス

だます。だましを食はず。だまされることはダマクウ。

イソスル 貝を掘つたりして濱遊びすること。

インド イソスル人。

ソマスル 雇はれて山へ割木を作りに行く。

ソマド ソマスル人。

ヤマースル 山で薪を採る。誰の持ち山へ入つても構はない。

シホスル 家資分散する。

あしこにやゝもうどうもかうもならでシホスルんぢやさうな あの家はもうどうにもかうにもなら
なくて家を疊むんだつてさ。

サユースル 人を支配する。サユースルと言へば思ふに任せぬの意。

何もかにもサユースルにやゝ…… 何もかも思ふ様にならなければ云々。

ソニスル 本當にする、信ずる。

チャイスル(見) 平手で叩く。

ミズスル(見) 人見知りする。

アットースル 悪意で仕返しする。

ウジリウジリスル 絶えず何か食べて口をもぐぐ／＼させてゐるのを言ふ。

ノポーヌル 怠け遊びする。怠け者をノポー、ノボクラ等といふ。

ギナギナヌル ぐづ／＼する(怠けて、又しよげこんで)。ギンナリギンナリスルともいふ。

キビキビヌル 成可く少量で済まさうとけち／＼すること。

ツンツンヌル 女の素気なくえらぶつて感じの悪いこと。

ケンケンヌル ツンツンヌルに似てゐる。容貌の好くもない奴がえらぶつて無愛想にすることである(男でも女でも)。

も女でも)。

フイフイヌル ふくれる、はぶてる。

スースーヌル そつげなくする、權式はる、身分不相應な態度をする(主に女の場合)。

テンゴテンゴヌル 拍子や歩調の合はぬ事。

ピョンピョンヌル 細い鞭などの振るにつれてうねるやうに彎曲する。しなぶ。

ドジゲジヌル きまりなくぐづ／＼する。

ホタホタヌル 格別用もないのに氣急しくあちこちすること。大人にいふ。

ホンガリホンガリスル 用事も無いのに歩きまはる。

シンクマンクヌル 餘念なく一生懸命にする。

オセフヌル 子供が氣取つて大人風をする。子供が相手の大人びたやり方の氣にくはぬ時など「オセフスナ」

とやる。

ヨシランフースル 見えても見ぬふり、聞えても聞えぬふりをする。

あしこの前通りや、ヨシラン顔も出来ず寄つて見た。あの家の前を通るとなれば素知らぬ風も出来ずまあ寄つてみたよ。

チヨサイモンニスル 馬鹿にしてからかふ。

ホメノホイジヨニスル ほめそやすこと。

シヨクノシヨダイニスル 趣味に熱中する。職業的に見える程。

チガンチガンサス 眩しく眼をパチ／＼さすこと。

○

ゴイヤク 辛抱出来ずいら／＼する。

ウシノル 遅刻する。相手の来やうの遅いのを、「ウシーノッて来るけん遅いわい」といふ。

ホボロウル 嫁がすねて里へ歸つてゐる事。

テヘンツク いらぬ手出しをする。イランテンゴイヤガナ(餘計な手出しをして呉れるな)と略同意。

アトヘンクー あとの祭。連中と一緒にゆく等が、驅付けてみればもう誰も待合はせの場所にゐないといふ時などに。

トチメンポフル あわて／＼處置に迷ふ。

ホーバナクウ 側杖食ふ。

アズリモチカヤス 物を作つたり擔つたりするに、力及ばずして弱り入ること。アズリモチカクともいふ。

ネシャゲル 重荷を積んで坂を頑張つて上る。

ノシャゲル (1)家運を興すこと、もとくは蛇の首を持上げるのに言ふ。(2)家の財産を消費して家運を傾けること。もとくは船が岩に乗上げて坐ることに言ふ。

ハシヤガル 家資分散の運命に逢着する。

ウチャゲル 際立つてよく見える。例「壁塗るとウチャゲルけんらうや(…からねえ)」

ギンズル 吟味する。

ヨコモル 横道を廻ること。

ヨコタエル 反抗氣分で怠ける。

あいつあとうくヨコクエテしまやがつた。

カミツク のぼせてしまふ。

子供等がどうぢや斯うぢややあ、わしやあほんまにカミツイテしまふやうなわい 子供等が何だかんだと言へば私は全くのぼせるやうだよ。

ツベラコク 嘘を言ふ。嘘つきはツベラロキ。

オペラコク 心にもなく敬語を濫用して嘘をいふ。

ドーツイバイコク ひどくふざげさわぐ。

ウンケツコク 重い荷持をして疲勞困憊すること。「よいよいウンケツコイタ」と言へば「いや全くえらい目

に遭つた、弱つた」の意。

アンケツココ 油断する、うつかりする。「すつかり安心してゐやがる」のやうな語調に用ひられる。アンケ

ツダマコクともいふ。

ノラコク 怠ける、——百姓は農を、商人は商賣を。

コマタトル 人が眞面目に話してゐるのへ茶々を入れて非を打ち、異を立てること。例へば人が或物を二十錢で買つて安かつたと言つてゐると、「いやそれは高い、どこ〜では十八錢である」等と滑稽に反抗すること。

コジリトル 人の言ふことに對して「さうぢやないかうだ」と打返すこと。何もかも人の言ふことは嘘で自分のは本當とする。滑稽味はなく、餘り人に好く感ぜられない。

オセワルナル 出来損ふこと。人間でも作物でもはじめよくて途中から變になつたやうなのにいふ。

ヨーススル 女が氣取つて殊更に作つた姿態をする。

シヨクスル 仕事する、卑罵の語。

ちいたあ(少しは)シヨクセー、シヨクをー。

スイジンニイク 潜水する(子供の水泳遊び)。

メンゲツイワウ 青年が九月十五日の夜、他所の田の畔の里芋をとつて來て食べることに。一軒の田について

三株までは取捨御免であつた。今はやらない。

グドノヤマーツク くど〜と不足を並べたてること。

サイキョヤク よけいな差出口を利く(言はなくても判つてゐるのに)。秋の村祭の獅子舞行事の統治役がサイキョニンである。

スポクワス 親が子供にかくれて外出する。子供の側から言へばスポクウである。

ハツシクワス すかたん食はせる。二人相互に張合つてゐてひよいと體をかはす。信頼させて置いて裏切るやうな事をするのにもいふ。

ヒバシネジル 焼火箸をあてる(一種の躰)。

ネジクリスワル 横柄な態度で、又喧嘩腰で胡坐かくこと。強請の態度にもいふ。

ザツクル、ザツクロウ 宴席で客一同着座し一席を成すこと。

さあ皆ザツクツてつかあされ さあ皆さんお膳について下さい。

ダブソスク 會席などで小便に立つ時の戯れの語。ダブソは船や風呂の水抜き栓。

サカクジクル 人の善意を却つて曲解して不平を述べ立てる(大人の主に男に就いて)。

ケツワル 仕事が引合はなかつたり嫌になつたりした時に、途中で放棄してしまふこと。ケツワツて逃げた等といふ。

ノズク (1)病氣見舞にゆく。(2)悔みにゆくことを悔みにノズクといふ。

○

ゴーガマウ 渦が巻く。

ゲドーツケル 犬猫を虐待すれば祟つて加害者に何らかの患ひを生ぜしめる。「そがな事をしょつたらゲド

ーツケられるぞ」等といふ。

タカネハル 目白が高い聲で曲を入れて啼き続けるのにいふ。

ムシガシヨウヘンバル 吐く前に水のやうなものが出て仕様のないこと。

カタイキガカカル 呼吸をすると肩の邊に痛くこたへて、胸を思ふやうに動かせず、呼吸も困難なこと。

ナガレイル 氣絶する。キューシナウともいふ。

ヒタホジレガスル 中氣又は死前に舌がもつれて言語がはつきりせぬこと。ペロがもつれるともいふ。

アトイハウ 後へ這ふで、收支相償はなくなること。

作は出來ず病人は居るし、アトイハウはあぢや(さつぱり缺損つゝぎだ)。

コテクリヤウ コタリヤウともいひ、全然縁もゆかりも無い者同志が偶然に譯もなく夫婦になることを輕蔑

していふ。

ドージガスワットル 度胸が据つてゐる。

オツチヲヒトル 落着いて靜かなこと。性格にも、家の靜かなのにも言ふ。

ジツパリヒトル 落着いてゐる(賞め言葉)。

オシノットル 沈着で威嚴があること。

あの人はオシノットルけに、何ぢやあはたががあく言つたつてませりやうて話するやうな事あしやあ

せん あの人は全くちやんとして居るから、なあと周圍にゐる連中がガヤ／＼騒ぎ立てたところで、そ

れに交り合つて同じやうな話をする事などしない。

シケトル 憔悴してゐる。

こんなあ此頃ちいとシケトルのよ 彼奴は此頃少し弱つてるんだよ(腹痛などで)。

ヨシボードル 悄氣で萎縮してゐる。

シユットヒトル 生氣が無い。自分の意見が通らなかつた時など、恥をかいたやうな氣持でぐしゃつとしてゐるのを言ふ。

ホゲホゲヒトル 物が豊かにあること。

此頃あしこはう、ちまが良うてホゲくヒトル 此のごろあの家は家運隆盛で何でも御座れの豊かなもんだ。

ツクロクヒトル 身體の肥滿、背丈の均齊のとれてゐること。

グンドリヒツチリユウ くどくどと不足を並べ立てる。グンドリシャンドリユウとも言ふ。グドノヤマーツ

ク(一七頁)に同じ。

グドグドユウ グドヒルともいふ。不足をいふ。ロヤかましく小言をいふ。

コニヨコニヨユウ 子供の言語。

ワチャクチャユウ 思ひくの人に人の言ふことなど耳に入れずに喋舌り散らして統制のとれてゐないこと。

ズベリコベリユウ くどくしくあれこれと言譯をする。ズベリコッペリユウとも。

スッペラコッペラユウ 甲が問へば斯う言ひ、乙が問へばあう言ひ、ぬらりくらりと出鱈目をいふこと。

キママノヒル！ユウ 氣儘の限りを言ふ(主に子供)。

コグトヒル ぶつ／＼次から次へと不平不満を並べたてる。

サイバシル 人の話をさへぎつて喋舌る。差出がましくする。

女子等をたごがサイバシリヤールガルな 女などが餘計な口出しをするな。

ミソシルガアタマニアガル 思ひ上る(小金が出来たり、少し許り物を知つたりして)。

アタマ！ユワエル 困り果てる。

ハツミソコナウ あてが外れる、目的がそれる。

テマ！ユウ 兎角手間を惜しむ。他家の仕事の世話には出澁るなど。

フヌケガサヌ 老筆する。フガヌケルともいふ。

オキヤシナウ かまどの焚き跡や火鉢の火を、用心深く灰で埋め隠すこと。炭火を保存する爲に灰をかける

にもいふ。

ヒンナル、ヒマンナル 月經をおこす。もとはベツナベともいつた。

オゲンナル 腐爛する。かびのひどく生えたのをいふ。

ネコンナル 挽いた粉がバラ／＼しなくなり、蜘蛛の絲でもつゞつたやうにつながる。

ワザワザニナル 束ねたものがぐ／＼になる。ワツケル(九九頁)参照。

ミツポテニナル 水に浸つてぼて／＼になる。

オーボキヌカヌ 大釜で炊いた大量の飯を大きな手桶に取出してあらましますことに言ふ。

ヨソノヒークワン 他所で炊いたものは食べない。自分の家で神祭りをする時に、悔みごとのある家のもの

は食べない。「他人の火をません」ともいふ。

イヤシリキラウ 作が土地の連作を嫌ふ。イヤシリとは連作地のこと。

アゼーカケル 田の土をあげて畦を塗り直すこと。

シロースル 稲作の爲の田の最後の仕上げ鋤きをする。シロズキといふのがその名。

タンボカエル タンボとは田の傍にある井戸。この水を汲んで田に流し入れてやる事。

コエータタム 堆肥を作ること。

カタガシワル 重い荷持ちをして堪へきれぬ程にこたへること。

ヒヨングリオウ 棒も何もなしに荷をふりかつぐ。

トンボフル 三人舁き(前二人後一人)。これをトンボガキといふ。

テンビンニヒテカク 長木などを二人舁きの棒の上に載せて舁く。

ヤマーコナス 或人の一山を伐採して薪につくる。

ナカギル 長い木をズプロゲタ即ち割木二たけの長さに切ること。ズプロゲタニキルともいふ。

ワルサキヒク 前項のズプロ(二三頁参照)を二つにひき切る。これを割ればよい。

エーガアル 山の落葉掻きや草刈り、又貝掘りなどに行つて、いゝのが澤山あること。

ウジコニツケル 氏子に列せしめる。お八幡様で御祈禱して頂くこと。ウジマイリ(六八頁)参照。

ヨースタタス 凧を飛ばす。

オマスガイル 舊幕時代年貢米査定の爲に坪刈りしたこと。お榊が入る。

ナガテガイットル 長いめの形になつてゐる。

ナガテノイッタ その形容句。

メンタシ(老) ありがと。頂いて受取る仕草と共にいふ。

オジャーレ 來給へよ。コジャーレとも。

イランサイコバチヤクナ 餘計な差出口をするな。サイコバチはサイハチ、サイコヅチ等ともいひ、又、イ

ランサイコバチツクナともいふ。

イランコトーサラスナ 餘計な事をしやがるな。

ドーヅキマワス なぐる(怒つた時の悪い言葉)。

デヤクラカシヤゲル なぐる(卑語)。

シマル しやがる。するの卑語。

ヌカシマル 言ひやがる。

ダマツトリマル 黙つてやがる。

○

カヤガタタン 足腰のたぐぬこと(病人、病上り、老人などの)。

ホンドリセン 體工合の悪いのがはつきりとよくならないこと。

カシゴカゴコロゲル　すねること。「ありやあカゴかい」とは、あれはすねてるのかの意。すね方の程度はハナ

カゴ(小籠)、チューカゴ(中籠)、ホボロカゴ(大籠)の順である。

マイガマエン　やりくりがつかぬ、家計不如意、やつてゆけぬ。

作は出来るけど醫者の方ガクいいることが絶えんけんマイガマエン。

ホーカブリヒテネヨーランニヤー　頰冠りして寝てゐなくちや——で、手も足も出なくなつて逼塞してゐる

ことにいふ。

ウチガナラン　或家の金廻りの悪いこと。

ゴクシヤリニタタン　物の役に立たぬ。何をやらしても満足に役立たぬのをけなした言葉。

ヒツチャクダラン　つまらない、何にもならない。

ヒョーツンベガアワン　二人向ひ合つて餅をつく時など拍子の合はぬこと。又理窟の合はぬにもいふ。

シコガツカン　整理がつかない、手に負へない、どうにもならない。

オツバガツカン　物事が滞滞して来て、又混雑して来て始末がつかぬ。

シオガツレニヤーマギレン　順潮にならねば逆風帆行は出来ぬの意。ツレシオは順潮。シオガナオラニヤー

ともいふ。潮が直るも順潮になるといふこと。

ツツメガツカン　結着がつかぬ(多くもめごとに關していふ)。

ハンドンニイカン　合點がゆかぬ、判断に苦しむ。

フントコトル　人の話に調子を合はせて、フーンとかへーエとか言ふ(主に昔話の聴手として)。

サラケツサンモンモナー 全然金を持たないといふこと。

ウンツキヤツベツク 泣面に蜂。運が盡きれば尻をつく。

ソルベクソーローヨ まよよ。

えい、ソルベクソーローヨ、やりつばなせ せいまよよ、このまよよをやつてしまへ。

イツツ 何時いつもく。

あしこの家はイツツ戸をたてとるがのう。

タツタ 追々、日増しに。

病人はタツタ弱るはあぢやわい(弱るばかりだよ)。

キョービ 當節。

イツチ 一番。例「○○がイツチ偉い」。

エツコロ、 ヨツコロ 大分。

ヤヨリ 大體、あらまし。

ナマラ 同右。

オーダタイ 大體のところ。

ヤー しきりと。

コンツメ こつくとしきりにやつてゐるのにいふ。

オモイシマ 思ひきり。

オンマク 思ひきり、一生懸命。

ネコンザイ すつかり、根元から。

ムサンコ 無茶苦茶に。

ゼツピ 是非に。

ナマジ、ナマジノカワ 一つそのこと。

ケツク 却つて。

ドダイ とつても。ドダイコダイといへば意味が強くなる。

ドツテ とても、非常に(肯定)。ドツテコツテも同じ意味である。

イツレモ とても(肯定)。

ネツカラ 容易に……、とんと……(否定)。

ネツカラ出来やしませんわい 何か細工物をしてゐるところを、どうですかなどと覗き込まれたやうな時の返事。

カー 容易に……(否定)。

お母あらい(お母あつたら)見い、カー戻りやあせんのぢやが。

ホド さうく……(禁止)。

ホド人を馬鹿にするな さうく人を馬鹿にするな。この言ひ方に使はれるだけである。

ズンド あまり……(否定)。「ズンド苦うな」と言へば、あまり苦くないの意。

サツチ、シャツチ 強ひて……(否定)。サチクリ、サチコク、サチコクリ、サッチムリニ等ともいふ。

サツせんにあならん事あ無あ 強ひてせねばならぬといふことばなし。

オーネガ 大體が、そもく。

ナレデ 平均して。

オツチラト おちついて、ゆつくり構へて。

ジツパリト 沈着に。

トツクラト 打寛いで寐ることにいふ。

シヨロリツト 瘦せた長身のひよろくとしてゐるのにいふ。

デツクラト がっちりと肥満してゐる形。

デツクテト 同右。

ガイニ ひどく。

アイジニ 全く、きれいに。

イチゲニ 一度に。一時に。

オリカニ 折りふし。

テンシニ 時たま。テンセニともテンネニともいふ。

トンボニ 不意に、俄に、豫告なしに。

チコーニ 近年に。

トニー とつくと。

テンドヤスーニ 小あつざりと容易に、至極容易に。

ヤンシニ しきりと。

コツテリ ぱったり出會ふのにいふ。滑稽味あり。

オイサラオイサラ 大聲で泣く様子。

クシリクシリ しく／＼と聲には出さぬ忍び泣き。クシンクシンともいふ。

キンジリキンジリ 蒸し團子のやうなねんばり／＼してゐるものを食べる時の感じ。

クンゼリクンゼリ とつおいつ(氣のもめるさま)。ウンゼリクンゼリともいふ。

チンネチンネ 出し惜しみするさまに言ふ。

そがにチンネチンネするもんぢや無あ、もつとえつとあげえ そんなに惜しざうにするもんぢや無

(いよ、もつと澤山おあげよ(母が子に))。

ホツタリホツタリ 用も無いのに出歩くさま。ホタホタスル、ホンガリホンガリスル(二三頁)参照。

チコチコ 小動きする状態をいふ。小まめに動く。鷹揚の反對。又、チコ／＼するといへばけち／＼するの

意もある。

オーツコーツ ようやつと。

ドーシコーシ どうかかうか。

ドーマリコーマリ 同右。

オテカラサテカラ あつちからもこつちからも。ぐるりから(せき立てられるなど)。

メッタコッタ　めつたに…(否定)。メッタコータともいふ。

御馳走ごちそうやなんかメッタコッタ食わりやせん。

ムテンサツテン　とんと、二進も三進も。ムテンナ(八三頁)参照。

グンズリヒツチリ　ぐづぐ。

テンボサツボ　テンボサブロクともいふ。危険を冒してやつてみる、のるかそるか。

イツサリワツサリ　ごくあつさりと言ふなど。

ラッカモナー　とてもぢやないがひどく澤山。ラッシモナー、ラッカイモナーともいふ。

ズットノソモソモ　一番の最初。

ヨガノヨシラク　一夜中。ヨガナヨツプテ、ヨガノヨツボテ等とも。

スツテモムイデモ　是が非でも。

キツテモムイデモ　同右。

イゴム ゆがむ。

カズム かどむ、匂ひをかぐ。」

ハツケ 畑。

ヤシヤク 夜食。

カワ 顔。

オラサキ 折先、樹木の折れた先。

ヒューマゴ 曾孫。

ジユブン 自分。

イマジユブン 今時分。

タノシユム 楽しむ。

ナジユム 馴染む。

ヒコジル 引摺る。

チランニクイ 面憎い。

ホトベル ほとびる。

ヘーサニ 久しく。

マイダリ 前垂。

キビヤ 木部屋、薪を入れる小舎。

オリタエル うろたへる。

コスバイー こそばゆい、くすぐつたい。「

コワシー 委しい。

ムクゲ 木魚。

クスボル くすぶる。

オツコ 男。

ハグイタ 羽子板。

キネキレ 木の片。

ヒボ 紐。

シンビヨナ まめやかな、神妙な。

アムナー あぶない。

ニノ 蓑。

ミカワ 膠。

レンボー 電報。

ジヨシ 漁師。

オトイシー 恐しい。

キタナ 汚い。

ヒテル 捨てる。

オトヒタ 落した。

タヒテ 出して。

ドヒテ どうして。

ホイタラ さうしたら。

ホーカ さうですか。

ユコー 衣桁。

ヨボシ 烏帽子。

イデル 茹でる。

○

ハール 這入る。

カータ 書いた。

アカ 赤い。

キサナクサー 汚い。

ジュルクター 馳す。

ナガータ 流した。

ネータツ 糞え立つ。「

ケール 消える。

メール 見える。

ヨーダ 讀んだ。

ヨリコーダ 喜んだ。

モーデ 揉んで。

カーニ こんにち。

サーニ そんなに。

アーニ あんなに。

ダーニ どんなに。

モーリ 家屋敷のまはり。

サンドラ 棧俵。

イリー 圍爐裏。

トラゼ とりあぜ、田の小畦。

ヤコスル やきこする、焼いてしまふ。

チヨダライ 手洗桶。

テバナ 手離し(自轉車に乗る時など)。

サシヤマ さしはま下駄。

トリヤゲル とりあげる、で片附けるの意。

ムニヤーゲ 棟上げ。

トツシヨリ 年寄り、老人。

ウツシャ 牛屋。

ヒヨーリ 日和。

クワレル 食はれる。

クワ 鋤。

マンガワ 馬に引かせて田を耕す鋤。

ニンギヤーカーナ 賑かな。

カニコ 籠。

ワシギリ 輪切り。

ヤシガテ やがて、もうすぐ。

ヤシダリ 屋垂、ひざし。

コーブ 昆布。

カータクマ 肩車。

ヨーナベ 夜なべ仕事。

キーリ 錐。

モーリ 子守り。

ウーリ 瓜。

ヒール 蛭。

ホーマイ 帆前船。

ヒーサシ 久しく(副詞)。

ゼツビ 是非。

モツチ 藕。

トッコロテン ところてん。

イツエン 一膳、飯一椀のこと。

ツエーダリコ 連れ。

シャクワン 左官。

ネゲワンス 寝罐子、よく眠る性の人。

ゲオンゲオン 犬のこと(兒語)。

ガネ 蟹。

アケ 飽く。

ズバクル 亡る。

スコキ しごぎ。

アンス あんず、杏。

アムナー 危い。

○

マツサラ まんざら。

ナルテン 雨天。

トイシミ 燈心。

タイテン 大抵。

トンサキ とつ先、尖端。

ネット 根、根元。

アイリ 蟻。

キリモン 着物。

あ と が き

かつて柳田先生のお言葉により、郷里の方言を一々の紙片に記していくらか差出しましたところ、やがてお手許に於て、このやうに立派な書物にして下さいました。先生とお世話下さった方々とに厚くお禮を申し上げます。

藤 原 與 一



認承協文出
號270202あ

著者
檢印

昭和十八年十二月二十日初版印刷
昭和十八年十二月廿五月初版發行 (1000部)

伊豫大三島北部分言集

定價 壹圓八拾錢
特別行爲稅相當額 八錢
合計 壹圓八拾八錢

著者 藤原與一

發行者 湯川龍造 東京都麴町區丸ノ内二ノ二

印刷者 堀修造 東京都牛込區榎町七

配給元 日本出版配給株式會社 東京都神田區淡路町二ノ九

發行所 中央公論社 東京都麴町區丸ノ内二ノ二丸ビル五八八區
振替東京三四 電話丸ノ内五三五―五三八
出版文化協會會員番號第一一七五〇七號

本社出版の書籍中、萬一落丁風丁等不備のものおはば早速お取代へ致します。

全國方言集

柳田國男編
中央公論社版

既刊

岩倉市郎著 喜界島方言集(品切)

定價 二圓八十錢

野村傳四著 大隅肝屬郡方言集(品切)

定價 二圓十五錢

柳田國男編 伊豆大島方言集

定價 一圓十五錢

原安雄著 周防大島方言集(品切)

定價 一圓三十錢

藤原與一著 伊豫大三島北部方言集

定價 一圓三十錢

續刊豫定

倉田一郎著 佐渡海府方言集

瀧山政太郎著 對馬南部方言集

上野勇著 群馬縣多野郡方言集

武田明著 讚岐廣島方言集

福里榮三著 薩摩揖宿郡方言集